

普通学  
要覽(五)  
日本文典大綱

19

634

Ⓜ

078577-000-9

19-634

日本文典大綱

鈴木 忠孝/著

M35.2

DAC-2295



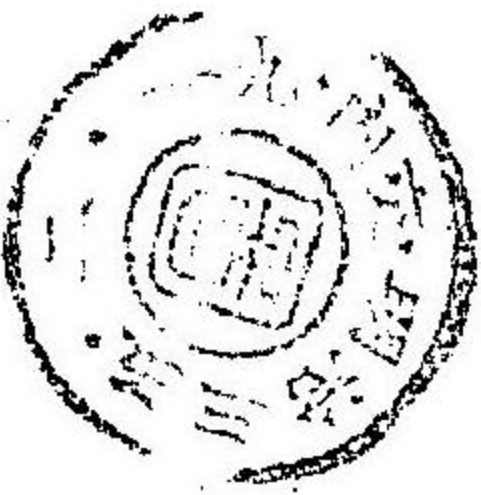
17-634

普通學要覽

(第五)

日本文典大綱

大成學館藏版



# 日本文典大綱

## 目次

### 音韻

清音(直音).....	一
濁音.....	二
半濁音.....	三
鼻音.....	三
拗音.....	四
反切.....	六
延音.....	六

略音……………八

通音……………九

通韻……………一一

音便……………一一

言語

動詞(作用言)……………一七

正格

四段活用……………一八

(係結法概要)……………二一

上一段活用……………二三

下一段活用……………二五

上二段活用……………二五

下二段活用……………二七

變格

加行變格……………三〇

佐行變格……………三〇

奈行變載……………三三

良行變格……………三三

良行變格基活活用……………三四

形狀言(形容詞)……………三五

久活……………三六

志久活……………三六

動詞の自他……………四〇

助動詞……………四三

受動助動詞……………四四

使役助動詞	四六
可能助動詞	四七
敬稱助動詞	四八
決定助動詞	五一
否定助動詞	六〇
推定助動詞	六三
比較助動詞	七〇
動詞狀助動詞	七一
形容詞狀助動詞	七四
助辭(天爾平波)	七六
係助辭	七七
決定助辭	八二
推定助辭	八四

否定助辭	八五
命令助辭	八六
希求助辭	八八
禁止助辭	九一
疑問助辭	九三
反動助辭	九四
感歎助辭	九七
餘情助辭	一〇三
強調助辭	一〇五
接續助辭	一〇七
連體助辭	一一七
雜助辭	一二〇
名詞	一二五

代名詞	……	一三六
數詞	……	一三九
副詞	……	一三〇
接續詞	……	一三三
感歎詞	……	一三三
接頭語	……	一三四
接尾語	……	一三九
文章	……	一四〇
係結	……	一四一
主語 客語 說明語	……	一四二

目次終

日本文典大綱

鈴木忠孝著

音韻

清音 (直音)

平假字

片假字

阿行(味)

あ	(韻一第)列阿
い	(韻二第)列以
う	(韻三第)列宇
え	(韻四第)列衣
お	(韻五第)列於

母音(單音)

ア
イ
ウ
エ
オ

(子 ル ヌ ム フ ス ッ ス ク) (略)

和行	良行	也行	麻行	波行	奈行	多行	佐行	加行
わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か
ゐ	り	(い)	み	ひ	に	ち	し	き
(う)	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く
ゑ	れ	(え)	め	へ	ね	て	せ	け
を	ろ	よ	も	ほ	の	ど	そ	こ

子音(複音)

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ
ヰ	リ	(レ)	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ
(子)	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク
ヱ	レ	(イ)	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ

濁音

ば	だ	ざ	が
び	ぢ	じ	ぎ
ぶ	づ	ず	ぐ
べ	で	ぜ	げ
ぼ	ど	ぞ	ご

バ	ダ	ザ	ガ
ビ	ヂ	ジ	ギ
ブ	ヅ	ズ	グ
ベ	デ	ゼ	ゲ
ボ	ド	ゾ	ゴ

半濁音 (次清音)

ぱ
ぴ
ぷ
ぺ
ぽ

パ
ピ
プ
ペ
ポ

鼻音

ん
---

ン
---

清音良行音と濁音半濁音鼻音とは純正國語の冒頭に起ることなし  
但、助動詞、天爾乎波は、獨立せざることはなるを以て、この限りにあらず

拗音

拗音(ひすみこゑ)は、漢字、梵字等の外國語音をうつすに用ふ。二類あり

其の一

父音 第二韻 (い、き、ち、に、ひ、み、り、る)  
母音 也行音 (や、ゆ、よ)

みや	ひや	にや	ちや	まや	きや	りや
みゆ	ひゆ	にゆ	ちゆ	まゆ	きゆ	りゆ
みよ	ひよ	によ	ちよ	まよ	きよ	りよ

濁音とも  
濁音とも  
濁音とも  
濁音とも

其の二

父音 第三韻 (う、く、す、つ、ぬ、ふ、む、ゆ、る、る)  
母音 和行音 (わ、ゐ、ゑ、を)

	りや	
	りゆ	
	りよ	

				くわ	
		つゐ	すゐ	くゐ	
				くゑ	

濁音とも  
濁音とも  
濁音とも



### 反切

反切とは、二音を約めて一音とするを云ふ  
 反切すべき二音の上なるを父位と云ひ、下なるを母位と云ひ、反切せられ  
 たる音を歸納音と云ふ  
 反切の法は、母位の韻を有てる父位の行の音に歸す

字 <sup>ル</sup>	る <sup>ル</sup>	ゆ <sup>ル</sup>	

### 延音

延音は、一音を二音に伸して呼ぶを云ふ

但し、語尾は、同韻相通す

#### (一) 加行音(く)に延す。(事)

き <sup>ク</sup> ( <sup>聞</sup> )	かよ <sup>ク</sup> ( <sup>通</sup> )	い <sup>ク</sup> ( <sup>目</sup> )	おそ <sup>ク</sup> ( <sup>恐</sup> )	ち <sup>ク</sup> ( <sup>散</sup> )
きか <sup>ク</sup>	はよ <sup>ク</sup>	いは <sup>ク</sup>	ねそ <sup>ク</sup>	ちら <sup>ク</sup>

#### (二) 佐行音に延す。(敬稱)

(注意)使役にあらず

なげ <sup>ク</sup> ( <sup>長息</sup> )	たつ <sup>ク</sup> ( <sup>立</sup> )	と <sup>ク</sup> ( <sup>間</sup> )	つむ <sup>ク</sup> ( <sup>摘</sup> )	と <sup>ク</sup> ( <sup>取</sup> )
なげか <sup>ク</sup>	た <sup>ク</sup>	と <sup>ク</sup>	つま <sup>ク</sup>	と <sup>ク</sup>
なげ <sup>キ</sup>	た <sup>チ</sup>	と <sup>ヒ</sup>	つ <sup>ミ</sup>	と <sup>リ</sup>
なげか <sup>シ</sup>	た <sup>シ</sup>	と <sup>シ</sup>	つ <sup>マシ</sup>	と <sup>ラシ</sup>

(三) 彼行音に延す。(狀)

なげく(長息)	かたる(語)	よぶ(呼)	えむ(咲)	ちる(散)
なげかふ	かたらふ	よばふ	えまふ	ちらふ
なげき	かたり	よび	えみ	ちり
なげかひ	かたらひ	よばひ	えまひ	ちらひ

八

略音

略音は、二語以上を以て組立てられたる成語の上につきて、連聲の便により、ある音を省きて呼ぶことあるを云ふ

(一) 子音の下の母音を省く

かりいは(假廬)	ひうを(氷魚)	かはおど(河音)
かりほ	ひを	かはど

(二) 母音の下の子音を省く

あしふみ(錠)	いきひき(厩)	うみしほ(潮)
あふみ	いびき	うしほ

(三) 中間の良行音を省く

すめらくに(皇國)	とりがり(鳥狩)	なるべき(可然)
すめくに	どがり	なべき

(四) 同音相重なる時、その一を省く

みづつく(水漬)	かははら(河原)	たびど(旅人)
みづく	かはら	たびど

通音

九

同音(行)相通するを通音と云ふ

事、物の名と名とが組立てらるる時に、上なる語の語尾が、第四韻(衣列)なる時は、その音を、かならず第一韻(阿列)に轉ず  
 若し、これを轉せざる時は、別々の事物となる。又、一方が動作をあらはす語なる時は、轉ぜず

たけやぶ (竹藪)	たかやぶ
かせかみ (風上)	かざかみ
てまくら (手枕)	たまくら
いねふね (稻舟)	いなふね
あめやどり (雨宿)	あまやどり
あれの (荒野)	あらの

(二)同行中にありて相通す

漢籍訓に、狐裘を『クツネノカハゴモ』と訓むも、この類なり

いを (魚)	うを
ひくち (火口)	ほくち
きがね (黄金)	こがね (くがね)
ちく (灸)	てく

通韻

同韻(列)相通するを通韻と云ふ

(一)彼行、麻行、同韻相通す

但し、麻行を古語とす

あぶ (蛇)	あむ
なべて (並)	なめて
とぼしび (燈火)	ともしび

(二)同韻中にありて相通す

いまし (汝)	みまし
にほどり (融麴)	みほどり
そこばく (若干)	こくばく

音便

音便は、音調を流暢ならしむるために、連聲の便により、音を轉じて呼ぶを

云ふ

(一)以列の子音を、母音の『s』に轉す

き <sup>o</sup> て <sup>o</sup> る <sup>o</sup>	き <sup>o</sup> て <sup>o</sup> る <sup>s</sup>
ま <sup>o</sup> して <sup>o</sup> (況)	ま <sup>o</sup> して <sup>s</sup>
ふ <sup>o</sup> く <sup>o</sup> た <sup>o</sup> み <sup>o</sup> (遂起)	ふ <sup>o</sup> く <sup>o</sup> た <sup>s</sup>

(二)ある子音を母音の『u』に轉す

か <sup>o</sup> か <sup>o</sup> ふ <sup>o</sup> り (冠)	か <sup>o</sup> う <sup>o</sup> ふ <sup>o</sup> り
な <sup>o</sup> が <sup>o</sup> く (長)	な <sup>o</sup> が <sup>o</sup> う
は <sup>o</sup> は <sup>o</sup> き (簪)	は <sup>o</sup> う <sup>o</sup> き
おも <sup>o</sup> ひ <sup>o</sup> て (愚而)	おも <sup>o</sup> う <sup>o</sup> て
つか <sup>o</sup> へ <sup>o</sup> ま <sup>o</sup> つ <sup>o</sup> る (奉仕)	つか <sup>o</sup> う <sup>o</sup> ま <sup>o</sup> つ <sup>o</sup> る
た <sup>o</sup> ま <sup>o</sup> は <sup>o</sup> り (繪)	た <sup>o</sup> う <sup>o</sup> ば <sup>o</sup> り
か <sup>o</sup> み <sup>o</sup> つけ (上毛)	か <sup>o</sup> う <sup>o</sup> づ <sup>o</sup> け

(三)『s』音を挿入す

ひ <sup>o</sup> む <sup>o</sup> か (日向)	ひ <sup>o</sup> う <sup>o</sup> が
と <sup>o</sup> り <sup>o</sup> で (取出)	と <sup>o</sup> う <sup>o</sup> で
ま <sup>o</sup> る <sup>o</sup> で (參出)	ま <sup>o</sup> う <sup>o</sup> で
ま <sup>o</sup> を <sup>o</sup> す (申)	ま <sup>o</sup> う <sup>o</sup> す

さ <sup>o</sup> づ <sup>o</sup> ち (終揆)	さ <sup>o</sup> う <sup>o</sup> づ <sup>o</sup> ち
ま <sup>o</sup> か (詩歌)	ま <sup>o</sup> い <sup>o</sup> か

(四)『u』音を挿入す

や <sup>o</sup> か (八日)	や <sup>o</sup> う <sup>o</sup> か
に <sup>o</sup> よ <sup>o</sup> く <sup>o</sup> わ <sup>o</sup> ん (女官)	に <sup>o</sup> よ <sup>o</sup> う <sup>o</sup> く <sup>o</sup> わ <sup>o</sup> ん

(五)『y』音を挿入す

む <sup>o</sup> か (六日)	む <sup>o</sup> ゆ <sup>o</sup> か (むい <sup>o</sup> か)
-----------------------	---

(六) 鼻音を挿入す

はべり (侍)	はんべり
---------	------

(七) ある音を省きて呼ぶ

(注意) 東を『ヒンガシ』といふは、猶  
音便なり。南を『ミンナミ』と  
いふは、當らず

ひむかし (東)	ひがし
どくきやう (讀經)	どきやう
もんじ (文字)	もじ
ほんい (本意)	ほい

(八) ある音を鼻音に轉じて呼ぶ

『すべかるめり』則を『すべかめり』  
『トキンメ』といふも、猶この音便なり

わらぐつ (草鞋)	わらんづ (わらう)
ねもころ (懇懃)	ねんころ
ほどほど (殆)	ほどんぞ

鼻音の下の喉音(阿行、也行、和行)が、その音と抱合して、奈行

せんあく (善惡)	せんなく
いんねん (因縁)	いんねん

音となる

りんゑ (輪廻)	りんね
----------	-----

(十) 『む』音の下の喉音が、同じく麻行音となる

さむあくだう (三惡道)	さむまくだう
さむゐ (三世)	さむみ
おむいやうじ (陰陽師)	おむみやうじ

(十一) 『つ』音の下の喉音が、同じく多行音となる

けつえきのはう (關腰袍)	けつてきのはう
せつおん (舌音)	せつどん

(十二) 語尾の鼻音を、『に』音に轉ず

らん (蘭)	らに
えをん (紫苑)	えをに
せん	せに

(十三) 語尾の『む』音を、『み』音に轉ず

どうまむ (燈心)	どうしみ
-----------	------

(四)拗音を直音に呼ぶ

まやうぞく (裝束)	さうぞく
もんまやうはかせ (文章博士)	もんざうはかせ
まやか (釋迦)	さか
せいりやうでん (清涼殿)	せいらうでん

(五)ある子音を促音に呼ぶ

せきかう (石脊)	せツかう
がくかう (學校)	がツかう
もちて (以)	もツて
やつこ (奴)	やつこ
にひた (新田)	にツた
おうて (道面) (おひて)	おツて
たふとし (費)	たツとし

(六)促音を挿入す

但、この際、その下なる波行音は、半濁音となる

かへりて (却面)	かへッて
またく (全)	まッたく
もども (最)	もッども
あはれ (天晴)	あッぱれ
もはら (専)	もッぱら

### 言語

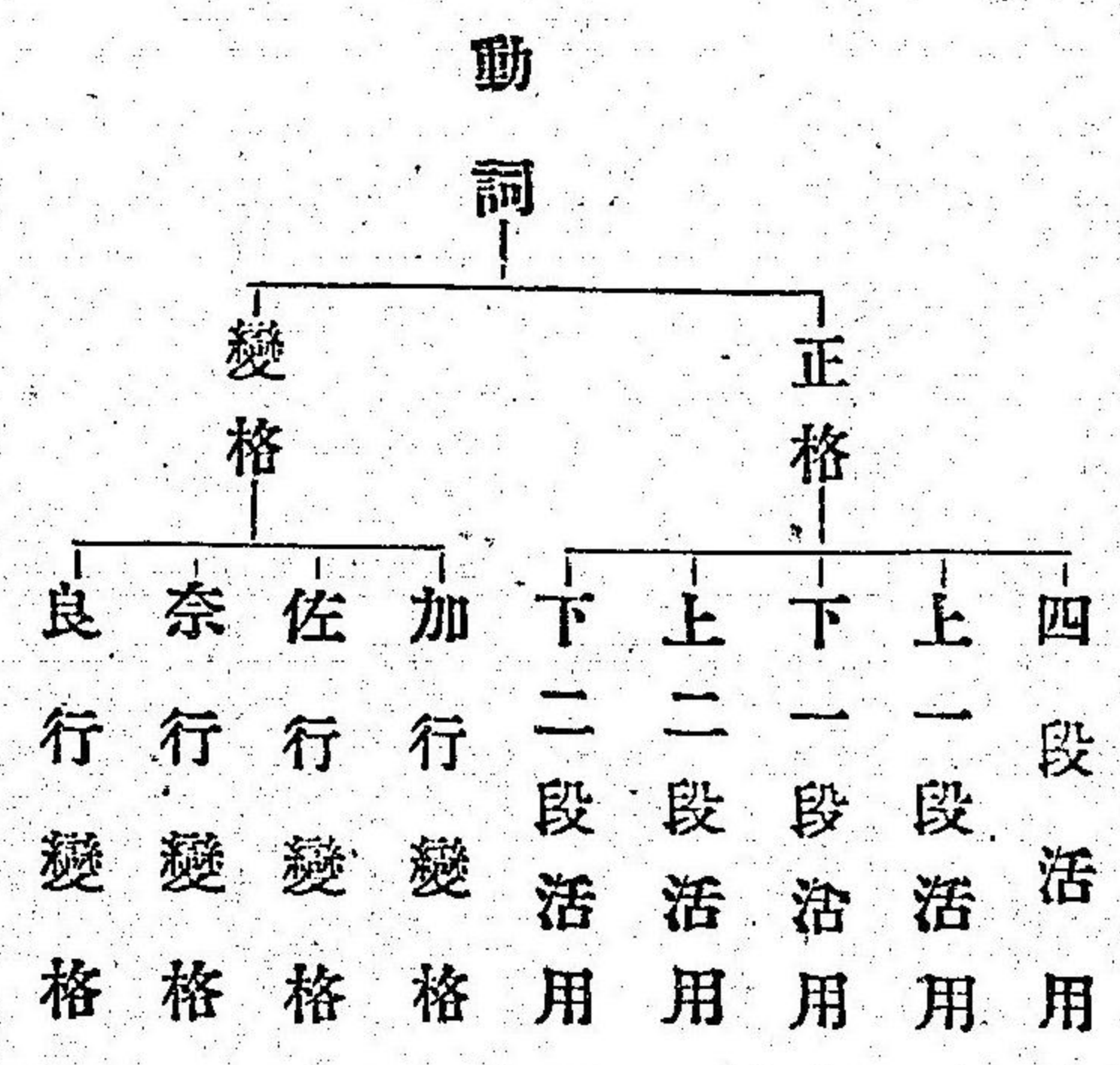
語尾の變化せざる語を、體言と云ふ。

語尾の變化する語を、用言と云ふ。

この語尾の變化を、活用と云ひ、この變化の及ばざる部を、語根と云ふ

### 動詞 (作用言)

動詞は、事物の動作、状況をいひあらはす語なり  
語尾の變化によりて、動詞を次の如く分類す



正格  
四段活用

良	麻	波	多	佐	加		
行	行	行	行	行	行		
降	住	思	打	押	咲		
ら	ま	は	た	さ	か	段然未	一
り	み	ひ	ち	し	き	段用續	二
る	む	ふ	つ	す	く	段止斷	三
る	む	ふ	つ	す	く	段體續	四
れ	め	へ	て	せ	け	段然己	五

れ	め	へ	て	せ	け	令	命
---	---	---	---	---	---	---	---

(よ)

(注意)

第一變化未然段は將然段とも云ひ、第二變化續用段は連用段とも云ひ、第三變化斷止段は終止段とも  
截斷段とも云ひ、第四變化續體段は連體段とも云ひ、第五變化已然段は既然段とも云ふ。以下同之

第二變化續用段の語尾は、名詞となることあり。これを名詞法と云ひ、その

名詞を動詞状名詞と云ふ

おもひ (思)  
わらひ (笑)  
かすみ (霞)  
よみ (讀)  
けぶり (煙)  
こほり (氷)

第二變化の語尾はまた上下に名詞と連なりて、熟語名詞となる。これを動詞の熟語名詞法と云ふ

物おもひ  
泣きわらひ  
朝がすみ  
歌よみ

おもひ人  
わらひ聲  
かすみかくれ  
よみ人

夕げふり  
薄こほり

けぶり草  
こほり水

(注意)

熟語名詞(名詞と名詞との熟語、又、動詞の熟語名詞)に於ては、多くは、下の名詞の發音を濁りて馴む。濁らざる時は、別々のものとなるべし  
かきろひ(陽炎)、たり(樽)、すまひ(相撲)を、後世、斷止段の語尾に轉じて名詞とす。但し、古語にも、ほたる(火垂)などの如く、斷止段より名詞とされる特例あること、なほ俗語に、おまふらふ(居候)などの特例あるに同じ

また、係結法の概則を、今、左表によりて心得おくべし

第一係	係
はもの(の)が(の)徒	
輕	結
斷止段	
命令格	

動詞、形狀言、助動詞、



以下皆同じ

係三第	係二第
こそ	なんかやどがの重
已然段	續體段

○練習 (一)

左の文中、縦線を施せる語どもは、いづれの段に属するかを説け

- (一) 肩にかけて、拜して退く。(徒然草)
- (二) 百千鳥をへぐる春は、物毎にあらたまれども、われぞふりゆく。(古今)
- (三) 今更に山にかへるな、時鳥、聲のさきりは、わが宿に鳴け。(古今)
- (四) 身を養ひて何事なを待つ。(徒然草)
- (五) 五君が跡を釣らば、われは鰻を釣らん
- (六) 昨日も釣れば、今日も釣る。

○練習 (二)

左の文中に誤と認むるものあらば、それを摘示し訂正してその理由を述べよ

- (一) 大日本史、若し御手許に御座候へば、暫時拜借仕り度候ふ
- (二) 待ちし花やうく咲けば、雨こそ降る。
- (三) 風吹けば、馬嘶き。
- (四) 不幸なる人をぞあはれめ。
- (五) いかなる貧苦も、凌げば凌がれぬ事があるべき。

上一段活用

き	段然未	一
き	段用續	二
きる	段止斷	三
きる	段體續	四
きれ	段然已	五

加行 (着)

き	命
き	令

奈行 波行 麻行 也行 和行

似干 (見) 射居

に	ひ	み	ぬ	ぬ
に	ひ	み	ぬ	ぬ
にる	ひる	みる	ぬる	ぬる
にる	ひる	みる	ぬる	ぬる
にれ	ひれ	みれ	ぬれ	ぬれ

に	ひ	み	ぬ	ぬ
---	---	---	---	---

二十四

○練習 (一)

左の文中縦線を施せる語を説明せよ

- (一) 雜煮。沙干狩。物見車。肌着。繻物。
- (二) 三人の善を見れば、それに見ならへ。

- (一) 爲朝射、之を撃す。
- (二) この繪は、よく見れば、煙物なりき。
- (三) この夢、よく箕にて籤れよ。
- (四) 若し魚喰れば、寒氣に觸るな。

○練習 (二)

次の誤文を訂正せよ

下一段活用

一	未然然	け
二	續用段	け
三	斷止段	ける
四	續體段	ける
五	已然然	けれ

命	令	け
---	---	---

(よ)

(注意) 續、續は、下二段活用なり

上二段活用

二十五

加 行 佐 行 多 行 波 行 麻 行 也 行 良 行

起 (掘) 落 戀 恨 老 懲

り	み	み	ひ	ち	(じ)	き	段然未	一
り	み	み	ひ	ち	じ	き	用段續	二
る	ゆ	む	ふ	つ	せ	く	段止斷	三
る	ゆる	むる	ふる	つる	せる	くる	段體續	四
る	ゆれ	むれ	ふれ	つれ	せれ	くれ	段然已	五

り	み	み	ひ	ち	(じ)	き	命	命
---	---	---	---	---	-----	---	---	---

(よ)

(注意) 口語(俗語)の語尾は、續體段に已然段に於て、其の「る」「れ」を、以列の音に附す

○練習 (一)

左の例中縦線を施せる語を説け

- (一) 種しあれば、岩にも松は生ひにけり。こひを戀ひば、  
逢はざらめやも。(古今)
- (二) 秋の夜は、露こそ殊に寒からし。草村毎に蟲のわかれ  
ば。(古今)
- (三) 上卿曰く、乘れ。騎二三廻の後、上卿曰く、下り。  
(建曆御記)

○練習 (二)

左の誤文を訂正せよ

- (一) 落ち人、瀬に怖るる。
- (二) 彼は、恨まば恨むべき人なり。

下二段活用

- (一) 老の繰言、人の聞くを耻つる。
- (二) 若し伊豆を得て、以て伊東氏に報ゆれば、足りなん。

良也麻波奈多佐加阿  
行行行行行行行行

枯消譽與兼捨瘦授(得)

れ	は	め	へ	ね	て	せ	け	え	段然未	一
れ	は	め	へ	ね	て	せ	け	え	段用續	二
る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	そ	く	う	段止斷	三
る	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	そる	くる	うる	段體續	四
る	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	それ	くれ	うれ	段然已	五

れ	は	め	へ	ね	て	せ	け	え	令	命
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

(よ)

和行 餓

る
る
字
字
字
字

る
---

(注意) 口語(俗語)の語尾は、續體段に已然段に於て、其の『る』を、衣列の音に附す

○練習 (一)

左の動詞の活用を問ふ

觸る。 欺く。 沃る。 暮る。 媚ぶ。 漕ぐ。 焼く。 行ふ。 堪ふ。 絶ゆ。  
 治む。 守る。 悔ゆ。 出づ。 閉づ。 企つ。 保つ。 營む。 試む。 改む。  
 任す。 盡す。

○練習 (二)

左の誤文を訂正せよ

(一) 山を越れば、いたく身體の疲勞を覺えたり  
 (三) 甲は、乙の榮を妨ぐ。

(二) わが故郷は、あまたの山河を隔つ。  
 (四) 嶺に消ゆ雪は、谷を流る水となる。

『選く』『忍ぶ』『貯る』『隠る』『恐る』『忘る』『埋む』等の如きふるくは四段に活き、後世は下二段に活けり

變格

加行變格

こ	段然未	一
き	段用續	二
く	段止斷	三
くる	段體續	四
くれ	段然已	五

こ	命	命
---	---	---

(よ)

加行

(來)

佐行變格

一
二
三
四
五

命
---

佐行 爲

せ	段然未
し	段用續
す	段止斷
する	段體續
すれ	段然已

せ	命
---	---

(よ)

この他に『座』の一語あり。但し、是は『大坐坐』の轉訛にして、古くは四段に活用せり

(注意) 名詞はみづから活用せず。若しそを活用せしめんとする時は、『ものす』『東す』の如く、この變格による

「旅す」「花さつらす」の如きは、「旅なす」「花さつらなす」の意なり。大鏡に「御烏帽子せせ給へりけるは」。

「音す」「こちす」などは「音のする」「こちのする」意なり。「八重葎して」「すみれのみにてなごも云へり

動詞狀の名詞を活用するは、皆この變格による。絶えず「盡きす」「しぐれす」「とみぢす」の如し。罪す「葉す」の如きも、亦これに同じ

漢語、その他の外國語を日本語化せしめて活用する時も、この變格による

### 奈行變格

奈行 往<sup>イ</sup>

な	段然未	一
に	段用續	二
ぬ	段止斷	三
ぬる	段體續	四
ぬれ	段然已	五

ぬ	令	命
---	---	---

(よ)

この他に『死ぬ』の一語あり。但し、是は『過ぎ往ヌ』の約音にして、漢語の『死』の字音にあらず

(注意)

命令格の語尾は、いづれの活用も五變化中の一に等しきを、この變格のみ異なれり

### 良行變格

一
二
三
四
五

命
---

命

良行 有

ら	段然未
り	段用續
り	段正斷
る	段體續
れ	段然已

れ	令
---	---

(よ)

この他に、『居ッ』『侍リ』との二語あり。但し、是はいづれも『有り』を基としたる語なり。『在リ』『然リ』『斯リ』等皆この格なり

(注意)

斷止段の語尾の、四段良行と異なるに注意せよ

また、四變格とも、助動詞等との連続上、つれの動詞と異なるふしづくに注意すべし

### ○練習

次の文の正否を辨せよ

- (一) 次の文の正否を辨じよ。
- (二) 三岩の上に鶉居る。
- (三) 五時鳥も五月こば、聞き飽くまでになりたり。

- (四) 鶉、枯れ枝の上に居る。
- (五) おもしろき見物に侍り。
- (六) 彼は、晝夜さなく、只管勉強をする。

(七) 来る人あれば、往ぬ人ある。  
(九) 死ぬ程のくるしみなり。

(八) 山には木もあり。花もあり。鳥も居り。  
(十) それは、まことに氣の毒の事にぞあり。

行りて

### 良行變格基活活用

四段活用の續用段に「て」の助辭が所屬して、良行變格の「有」に活用するを、良行變格基活活用と云ふ

その續用段に所屬せる「て」を反切し、子音の下の母音なる「あ」音を省く時は、已然段の語尾に「らりりるれ」と云へる助動詞を所屬せしめたる形式をなすべし。但し、組織上、續用段より來れるものなることを忘れざれ

#### (注意)

この活用は、四段活用にのみ限れるを。佐行變格の續用段なる「し」より活用する時は「せらせりせりせるせれ」さなるべし。さて、世にこれを助動詞とせるものあるは、その獨立せずといふを以てなるべし。されど是は佐行變格と等しく、名詞、または動詞名詞のみを受けて、動詞としての動詞を受けざるを以て、助動詞といふべからず。萬葉、三に「久かたのあめゆく月を綱にさし我大君は蓋にせり」の如き、普通動詞の用法に等しければ、猶、この活用なる動詞と見るべし。

後にあらはるべき助動詞の「たり」「て有り」「けり」「來てあり」「めり」「見て有り」「まじりに、この活用をなせるなり

### ○練習

次の文中、良行變格基活活用として成立すべき語と、成立すべからざる語とを辨明せよ

- (一) 甲は、乙を殺せり。
- (三) 柴つみ舟に人を載せり。
- (五) 甲國は、乙國との戦に勝てり。
- (七) 四年の課程を卒へり。依りて茲にこれを讀す。
- (九) わが申せること、忘れ給ふな。
- (十) 梅の花それとも見えず。久方のあまざる雪のなべてふれくば。(古今)

- (二) 雨降れる夜、蟲の音がすかに聞えり。
- (四) 文明の進歩は、日々にその速度を加へり。
- (六) かくても猶われを疑へらば、今はすべなし。
- (八) 彼は、この頭いたく瘦せり。
- (十) 某は世界徒歩旅行を企てり。

### 形状言 (形容詞)

形状言は、事物の有様、性質等をいひあらはす語なり

今、語尾の變化によりて、左の二類に分類す

久活

『くしき活用』とも云ふ。語根に『し』音のなきもの、こゝに活用す

志久活

『ましくまき活用』とも云ふ。語根に『し』音を含むもの、こゝに活用す

久活

く	段然未	一
く	段用續	二
し	段止斷	三
き	段體續	四
けれ	段然已	五

かれ	命	命
----	---	---

(よ)

志久活

く	段然未	一
く	段用續	二
○	段止斷	三
き	段體續	四
けれ	段然已	五

かれ	命	命
----	---	---

(よ)

(注意)

形状言は、元來事物の形容をいひあらはす語なるを以て、みづから命令を課すべき能力なし。その『かれ』となるは、續用段の語尾が其行變格『あれ』の命令格に抱合せらるなり

但し、已然段の語尾なる『けれ』も、『ま』の轉せるものにして、ふるくは『けれ』の『ら』なる變化する。『こそ』の係をも『き』の語尾にて結入り。その『けれ』の轉せるは、『き』の『せ』を『せ』に等し

を、『善けむ』『悪しけむ』『いふに等し』『まけへ』『たひく』『なまは、生得けへ』『活く』『き語なり』。遠く『薄く』『なまを、遠けへ』『薄けく』『なまふはわるし。但し、『無き』を『なけく』『多き』を『多けへ』『憂き』を『憂けへ』『寒き』を『寒けく』など云ふは、多くは名詞法の古言の格なり

形状言は、加行、佐行の兩行に雜りて活用す

形状言の名詞法は、語根よりす



遠の朝廷  
面白の夜

(久活)

苦しの業  
貧しの身

(志久活)

形状言の熟語名詞法も語根よりす

白がね  
浅黄  
長ばなし

裏白

遠浅 (久活)

髪長

空し烟

かなし妹 (志久活)

賢し女

(注意)

「空し」「可惜し」等を、「空車」「可惜夜」などいふことあるは、志久活に於て「し」音を省略せる特例にして、却りて久活に於て「な無し千鳥」「棚無し小舟」など、「し」音を挿入せる特例あるに同じ  
「茶」作「よし、あし」などは、いひすゑて事物の名とする一の特例なり  
形状言の語根は、また「高光る」の如く動詞にも連続し、「薄ぐらし」の如く他の形状言にも連続し  
又、「寒さ」「寒み」「寒げ」の如く接尾語を加へて名詞状をなす

形状言に變化の不完全なるものあり

一 二 三 四 五

命

若し	蓋し	少し	段然未
く	く		段用續
○	○	○	段止斷
		き	段體續
			段然已

			令
--	--	--	---

○練習 (一)

次の例中、形状言を摘示して、その何段なるかを説き、又名詞法熟語、名詞法等を説明せよ

- (一) おのが波に同じ未葉ぞしなれぬる。藤さく田子のうらめしの身や。(新古今)
- (二) つれなの御心がまへや。と思ふも、にくくはあらで。(狭衣)

- (三) かくばかり惜しと思ふ夜を。いたづらに寝てあかすらん人さへぞうき。(古今)
- (四) きしに過ぎて尊くこそおぼしけれ。(徒然草)

- (五) 夜深くいそぐべきころのさまにもあられば、すこしたゆみ給へるに。(徒然草)
- (七) 暮れふるあら田に水なますれば、うれしがほにもなく蛙かな。(山家)

- (六) なきさむる花しなれば、鶯も、はては、ものうくなりぬべらなり。(古今)

○練習 (二)

左の誤文を訂正してその理由を説明せよ

- (一) 廉耻の心年々に衰へゆくぞ、甚なげかし。
- (二) 世の中にいっぱりなければ、人の心、いかにうれしからん
- (三) 榮ゆる御代ぞ、めでたけれ。
- (四) 秋深み夜風ほげし。うべしこそ、四方の里人衣うつなれ。(永長二年東塔東谷歌合)
- (五) のごさや、梅さく宿の夕けぶり。

動詞の自他

すべての動詞を分類して、自動詞、他動詞の二類とす

他動詞は、動作が、主にのみ止まらそして、他の事物に移りゆくを云ひ。自動詞は、動作が、主にのみ止まるを云ふ。動詞は、自他一方のみありて、それに對する自他なきものあり。又、語尾の變化によりて自他相對せるものあり

		立 <sup>タ</sup>			
自	他	自	他		
下二	上一	四	下二		
え	み	た	て	段然未	一
え	み	ち	て	段用續	二
ゆ	みる	つ	つ	段止斷	三
ゆる	みる	つ	つる	段體續	四
ゆれ	みれ	て	つれ	段然已	五

え	み	て	て	令	命
---	---	---	---	---	---

(よ) (よ)

		満		亂		聞	
自	他	自	他	自	他	自	他
四	下二	下二	四	下二	四	下二	四
た	て	れ	ら	え	か	え	き
ち	て	れ	り	え	き	ゆ	く
つ	つ	る	る	ゆ	く	ゆ	く
つ	つる	る	る	ゆ	く	ゆ	く
て	つれ	る	れ	ゆ	れ	ゆ	け

(注意) 自他の區別に於て、活用の行は、必しも一致のみせず。「代る」「代ふ」、「流る」「流す」など、相違せるを知ら

○練習

て	て	れ	れ	え	け
(よ)	(よ)	(よ)	(よ)	(よ)	(よ)

左の例における動詞の自他をいひ、相對の自他あるものは、それをい

- (一) 一人を殺す。
- (三) 雨降る。
- (五) 馬に乗る。
- (七) 暑さを凌ぐ。

助動詞

助動詞は、本動詞に所屬して、その意を助くることばなり

助動詞は、本動詞に等しき語尾の變化を有す

他動詞を分ちて、能動、受動の二種とす

能物は、動作の主がその動作をするを云ひ、受動は、動作の主がその動作を受くるを云ふ

能動の形は、常の他動詞のに等し

- (二) 山に登る。
- (四) 子は、父に似る。
- (六) 火焼ゆ。
- (八) 暑さに堪ふ。

(一) 受動助動詞

受動をいひあらはすには本動詞に次の助動詞を所屬せしむ

時	本動詞の尾	一	二	三	四	五	命令	俗譯
現在	未然段	れ	れ	る	る	る	れ(よ)	レル
現在	未然段	られ	られ	らる	らる	らる	られ(よ)	ラレル

(注意)

能動、受動は、他動詞にのみありて、自動詞にあるべきことわりなし。但し

嬉しさに泣かる

途中雨に降らる

子に死なる

なごいふ時は、自動詞より來れる受動の形に似たれども、これを能動にいひかふる能はず。俗語の一格なり。畢竟、能動、受動は、相對の分類なればなり

時は、斷止段を以て、標準とす。みづからの未然段、已然段は、未來とも、過去ともなるべし。續用段は、連續の助動詞によりて一定せず。續體段は、斷止段に等し。又、命令は常に現在なり。

以下倣之

○父がなま學生につかばれたてまつりて。(大鏡)

○いかに御心ゆき、めでたくたばえてあそびしげんこ、

たしはつらる。(大鏡)

○長良の中納言、ここの外にこえられ給ひけんをり云云

(大鏡)

○月夜には、こぬ入またる。かきくもり雨もふらなん、

わびつゝもれん。(古今)

○あらたまの年たちかへる朝よりまたるゝものは霧の、

る(拾遺)

○腰きり損ぜられてかたはになりにつけり。(徒然草)

○練習(一)

左に掲ぐる能動の動詞を受動にいひかへよ

欺く。見る。飛く。着る。閉づ。求む。諫む。讀む。

○練習(二)

左の例中における動詞の自他及能動受動を指示して、その何段なるかをいひ、また用法の誤まれるものあらば、それを辨明せよ

- (一) 木のつから都にいで、は、乞食となれることを耻づきいへども、歸りて茲に在る時は、他の俗塵に着する、をなめられぶ。(方丈記)
- (三) したはれて來にし心の身にしなければ、かへるさまには道も知られず。(古今)

- (二) かく人にはぢらるゝ女、いかばかりいみじきものぞと思ふに女の性はひがめり。(徒然草)
- (四) 秋は、ものごきに、あはれに感じらる。
- (五) 彼は、少年のころ、神童と目されしものなり。

### (二) 使役助動詞

動作の主が、他をしてその動作をなさしむるには、次の助動詞を用ふ

時	本動詞の所屬語尾	一	二	三	四	五	命、令	俗譯
現在	未然段	しめ	しめ	しむ	しひる	しひれ	しめ(よ)	サセル
現在	未然段	せ	せ	そ	そる	それ	せ(よ)	セル
現在	未然段	させ	させ	させ	させる	させれ	させ(よ)	サセル

(注意) 「す」「しむ」の約音なり

また相互連続せしめて、「せしむ」「せむ」「せむる」ともいふべし

- よるをひるになしてさらしめ給ふ。(竹取)
- 家の人がねばかりけるに合せて、あけるひまもなく守らす。(竹取)
- いよ／＼みち／＼のさえなならはさせ給ふ。(桐壺)
- 人をたきて、高き木にのぼせ(下)して、槍をきらせし

- に。(徒然草)
- おほしいづるころありてあないせさせて入り給ひつ(徒然草)
- 夜ごころに人をふせて守らまれば(古今)

### ○練習

左の例中にねける使役助動詞の用法の當否を辨せよ

- (一) 父、子をして相撲を見せしむ。
- (三) 隨意に庭園に入るを得しむ。
- (五) わが家に人を來しむ。

- (二) 學生に課程を温習さする。
- (四) わが家に人を來さす。
- (六) 隨意に庭園に入るを得しむ。

### (三) 可能助動詞

動作の主が、克くその動作に堪へ得る意をあらはすに、次の助動詞を用ふ

時	本動詞の 所屬語尾	一	二	三	四	五	命令 俗譯
現在	未然段	れ	れ	る	る、	るれ	れ(よ) ル
現在	未然段	られ	られ	らる	らる、	らるれ	られ(よ) ラレル

(注意)

可能の助動詞は、形に於て受動の同じいへども、其の性質が受動と異なるを以て、これを能動にいひかふる能はず

○かくてもあられるよき、あはれに見るほごに。(徒然草)

○いづくにもすまれば、たゞすまであらん。業のいほりのこぼしなる世に。(新古今)

○練習

次の例につきて、受動可能のけぢめを辨せよ

- (一)この酒、飲まば飲まる。
- (二)蛙、蛇に呑まる。
- (三)朝顔に釣瓶取られてもらひ水。
- (四)われは、この任に堪へらる。
- (五)魚鳥の肉も、醜詰にする時は、長く時へらる。
- (六)仁義、孔孟に説かる

(四) 敬稱助動詞

他者に對して尊敬の意を表すに用ふる助動詞を、敬稱助動詞と云ふ

時	本動詞の 所屬語尾	一	二	三	四	五	命令 俗譯
現在	未然段	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ(よ) アツパス
現在	未然段	せ	せ	そ	そる	それ	せ(よ) アツパス
現在	未然段	させ	させ	そせ	そせる	それ	させ(よ) アツパス
現在	未然段	せさせ	せさせ	せそせ	せそせる	せそせれ	せさせ(よ) アツパス
現在	未然段	れ	れ	る	る、	るれ	れ(よ) アソバサル
現在	未然段	られ	られ	らる	らる、	らるれ	られ(よ) アソバサル
現在	未然段	せられ	せられ	せらる	せらる、	せらるれ	せられ(よ) アソバサル
現在	未然段	させられ	させられ	させらる	させらる、	させらるれ	させられ(よ) アソバサル

(注意)

敬稱の助動詞中、使役の助動詞と受動の助動詞との形に等しきものあり。その使役の形なるは、れほくは綴用段を用ひて「給ふ」その他の敬語を以て連続す。最敬の稱なり

○山崎にて出家せしめ給ひてけり。(大鏡)  
 ○渡らせ給ふたび毎に、まるへき物を必奉らせ給ふ。(大鏡)  
 ○後三條、既かくれさせたまはし。して後三條。(金葉)

○申し上げたまはらんごなん申されつるごと。(枕草子)  
 ○香爐峰のありさまいかならん。と仰せられければ。(十訓抄)

○練習

次の例中にれける助動詞を解説せよ

- (一)合戦の習なれば、一旦の勝敗は、必しも御覽せらるべからず。(太平記)
- (三)あはや、法皇の流されさせたまはしませり。(平家)
- (五)御馬より落ちさせ給ひ、御首取られさせ給ふ。(源平盛衰)
- (七)あけおそりやま、うたがはしうたばされつるな。(桐壺)
- (九)みすのふきあげらるゝな。(野分)

- (二)若き男にてありける時、夢を見たりければ、合せさせんきて、夢解の女の許にゆき。(宇治拾遺)
- (四)八月ばかり、たまへに前栽植させ給ひて、ひびくとに歌よませさせ給ひける時。(玉葉)
- (六)南のひさしに、たましよそはす。うちき、しこね、皆新しくせられたり。(宇津保)
- (八)主上、やう／＼に調子をわけて、ふかせ給ひけるに。(宇治拾遺)
- (十)仲正が女、皇后宮にはじめてまゐりたりけるに、琴ひ

- (十)からめとりて、院の御所におてまゐりぬ。まづ仔細を問はる。(古今著聞)
- (十二)額に阿字をかきて、縁を結ばしむることをなんせられける。(方丈記)
- (十四)跡方なく平に打ひしがれて、二の目など、一寸ばかりうちいだされたるな、父母がへて。(方丈記)
- (十五)まわすられん時まのへこそ、遊千鳥ゆくへもしらぬ跡をこゝむる。(古今)

- くまをかせ給ひて、ひかせさせ給ひければ。(金葉)
- (十三)すべて、男をば女に笑はれぬやうにおふしたつべしとぞ。淨土寺前關白殿は、なまなくて、安喜門院のよく教へまわらせさせ給ひける故に、御こまばなごのよきぞと。人の仰せられけるこや。山階左大臣殿は、あつしの下女の見奉るもほづかしく、心づかひせらるること、仰せられけれ。(徒然草)

(五) 決定助動詞

事物の動作をなほたしかにいひ定むる助動詞なり

時	本動詞尾の	一	二	三	四	五	命令	俗譯
過去	續用段	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね(よ)	(ナツ)タ

〔注意〕

自然の動作を受けて、自動詞に所属す。故にわはくは、他稱（三人稱）の主を有す  
但し、命令の主は對稱（二人稱）なり。（以下倣之）

この助動詞は、もこ「往」の意なるを以て、奈行變格の「往ぬ」「死ぬ」と重複して連続せず  
又「往」の義を添ふる時は、他動詞にも連続すべし

○いざ櫻われもちりなん。一さかりありなば、人にうき  
め見えなん。（古今）

○雪のうちに春は來にけり。鶯のこぼれる涙、今やさく  
らん。（古今）

○秋は來ぬ。紅葉は宿にふりしきぬ。道ふみわけて問ふ  
人はなし。（古今）

○秋きぬ「さめにはさやかに見えぬも、風のれきにぞ  
おどろかれぬ。（古今）

○櫻花ちりぬる風のなごりには、水なき空に涙を立ちけ  
る。（古今）

〔注意〕

人為の動作を受けて、他動詞に所属す。故に、わはくは、自稱（一人稱）の主を有す  
「止」トマル意なり

○沖津浪たがしの濱の流松の名にこそ君を待ち渡りつれ  
（古今）

○彦星にこひはまさりぬ。天の川へだつる関を今はやめ  
て（よ）。（伊勢）

○こひは、ささづきなご心して（を）。（舞火）

○ねぬ夜こそ数つもりぬれ。時鳥きくほごもなきこゝろ  
により。（後拾遺）

○ちりぬれば、こふれしるしなきものを。今日こそ  
櫻をらば、をりてめ。（古今）

○君がよは、鶴の郡にあえてきれ。さだめなき世のうた  
がひもなく。（後撰）

○はや舟出して、この浦を去りぬ。（明石）

過去	續用段	て	で	つ	つる	つれ	て	（よ）	（し）	タ
----	-----	---	---	---	----	----	---	-----	-----	---

〔注意〕

人為の動作を受けて、他動詞に所属す。故に、わはくは、自稱（一人稱）の主を有す  
「止」トマル意なり

○わがよはひ君が八千代にこりそへて、さめめきては  
おもひでにせよ。（古今）

○岩間には氷のくまびうちてけり。もりこし水も絶えて  
音せず。（好忠集）

○身は捨てつ。心なだにもはふらまじ。遂にはいかげな  
るぞ知るべく。（古今）

○われつゝぞまひて折りつる。年のうちに春は幾日もあ  
らじと思へば。（古今）

現在	斷止段	○	○	なり	なる	なれ	○	ワチ	イヤ
----	-----	---	---	----	----	----	---	----	----

〔注意〕

「有り」の活用に、感歎の意の「な」の加はれるものなり。  
但し、その「な」のみなるときは、結ばれたる動詞の語尾を受けて、時を一定せずといへども、  
既にかく活用する時は、斷止段にのみ所属す

又、自然決定の斷止なる「ぬ」「し」と、人為決定の斷止なる「つ」「を」を連続して、「ぬなり」「しつなり」



こやうにいふ時は、その所属は、首辭の格による。以下倣之  
良行變格は、續體段を受くる特例なるを以て、次なるさまがひ易し。注意すべし

○秋の野に人まつ蟲の聲なり。われこそよきていささ  
ぶらはん。(古今)

○秋風に初雁がれぞきこゆる。たが玉づきをかけてき  
つらん。(古今)

○いつしつさわがまつ山に今はきてこゆる浪にゆる、  
袖かな。(後撰)

○忽にこの世を去らんとする時にこそ、はじめて過ぎぬ  
るたのあやまれることはしらるなれ。(徒然草)  
○信濃なる淺間の山もゆなれば、ふじの烟のひやな  
からん。(後撰)

現在	續體段	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ(よ)	シダイヤヤ モノヤヤ
----	-----	----	----	----	----	----	-------	---------------

(注意) 「ニアリ」の約音なり。故に、體言にも所属し、又、形状言(續體段)にも所属す  
又「ゆるなり」「つるなり」をやうにいふべし。前なるこの相違に注意せよ

○これはたゞ、心ざしのはじめを見するなり。(宇治拾  
遺)

○秋はて、人も手ふれぬひつちほの、わがゆもてれひ  
いづるなり。(六帖)

○かたみこそ、今はあたなれ。これなくば、忘る、時も  
あらまじものを。(古今)  
○あひ見つるこよひのあはれ夢なれ(な)。さめてはもの  
を想はざるべし。(風雅)

半過去	續用段	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ(よ)	テヲル
-----	-----	----	----	----	----	----	-------	-----

(注意) 「テアリ」の約音なり  
「にたり」さはいふべく、「てたり」さはいふべからざるを知れ  
「巧笑備たり美目盼たり」など、體言を受くるは「トアリ」の意にして、漢語訓なり。但し、蜻蛉  
日記に「あくれば五日の曉に、せうきたる人、ほかより来て」、又、六帖に「住みまげもいはたる  
べくも見えなく、なまほほもなき身をこがすらん」など、たまく體言を受けたる例なきにあ  
られども、蜻蛉は錯簡多き書にして、文調よりいふ時も、「せうきたる」の誤寫ならんも知り難く、  
六帖なるは、「はたる」をよめる歌なるものから、この歌、物名にして、物名には、通常歌によま  
ざる音便など、破格の例もあれば、これを以てうけはりて體言を受くる例さばし難し  
又「またり顔」は、熟語名詞法なり

○告げたらば、わがためし、あしくやあらん。(宇治)  
○女のもさよりたこせたりける。(古今)  
○苗代の水は、いなぬにまかせたり。民やすげなる君が  
御代かな。(金葉)  
○鶯のむかしをこひてさへつるは木つたふ花の色であせ  
たる(少女)

○ゆくまきも見えぬ波路に舟出して、風にまかする身こ  
そうきたれ。(玉葛)  
○おまへなる水なさらせ給ひて、これしばし持ち給ひた  
れ。(大鏡)

過去	續用段	けら	けり	けり	ける	けれ	○	テキタ
----	-----	----	----	----	----	----	---	-----

(注意)

「來テアリ」の約音にして、半過去をなすことあり。推定を斷定せる時、殊に然りせず。降り積みし高根のみ雪解けにけり。清瀬川の木の白濁(新古今) などの如し

又「にけり」「てけり」「いはるへし」

○ふる里となりにし奈良の郡にも、色はかはらず、花はさきけり。(古今)

○ひさまたの露の上にて見る菊は、天津星ぞぞあやまたれける。(古今)

○雪ふりて年の暮れぬる時にこそ、遂にもみぢぬ松も見えけれ。(古今)

過去	續用段	○	○	き	し	しか	○	(スル)タ (シマツ)タ
----	-----	---	---	---	---	----	---	-----------------

(注意)

「き」「けり」の約音にあらず。又「にき」「てき」「いはるへし」加行、左行の二變格は「き」を除きて、未然段に所屬する特例なり。都いで、君に逢はんまにものな。こしひもなく別れぬるかな。(土左日記) なるこよりさしだされし舟よりも、われぞよるべもなき心地せし(後撰)

○風にしも何がまかせん。櫻花にほひあかねにちるはうかりき。(御撰)

○夕どりなるひささ色ぞ春は見し。秋は色々の花にぞありける。(古今)

○こひすてふわが名はまたき立ちにけり。人知れずこそたもひそめし。(拾遺)

○今こんさひひて別れしあしたより、思ひくらしのれのみぞなく。(古今)

○われを君、なにはの浦にありしは、うきめをみつのおまきなりに。(古今)

現在	斷止段	○	○	てふ	てふ	てへ	てへ(よ)	トイフ
----	-----	---	---	----	----	----	-------	-----

(注意)

「トイフ」の約音なり。故に、ふるくは「チフ」も「トフ」も「トフ」も云へり。此の助動詞は、歌語なるを以て、急激なる場合の外、文章に用ひず。又、體言、形状言をも受く。文章に用ひたる例

かぐや姫てふ大のす人のやつが、人を殺さんとするなりけり。(竹取)

誰てふ物狂ひか、われ人にさおもはれんとは、おもはん。(枕草子)

又「ま」にて受けたるを以て、係によつて結ばれたる語尾をも受くへし。△の例、たよび、後の「ま」の條を參看せよ。

- そむくまで、雲には乗らぬものなれど、世のうきこゝろぞよそになるてふ。(伊勢物語)
- むかしより名高き宿のこゝろの葉は、このもこにこそおちこまらるてへ。(拾遺)
- 思ふてふこゝろはいはでも思ひけり。つらきも今はつらしと思はじ。(後拾遺)
- △われのみや子こもたるてへば、高砂のなのへにたてる松も子もたり。(拾遺)

○練習 (一)

左の例中にねける決定助辭を説明せよ

- (一)かくの如く、心のゆくまじり、うたるなり。(十訓抄)
- (三)春やまき。谷の鶯うちほぶき、今日白雪のふるすいづなり。(拾遺歌)

- 今更にさふべき人もおもほえず。八重葎して門させりてへ。(古今)
- 月夜よし夜よし人につげやらば、こてふに似たり。まだすしもあらず。(古今)
- われやうき。人やつらき。こちはやぶる神てふ神にさひ見てしかな。(拾遺)
- 涙こそあふみの海となりけれ。みるめなしてふながめせしまに。(後拾遺)

- (二)男もすなる日記といふものを、女もして見んとするなり。(土左日記)
- (四)しき妙の枕の上。すさねなり。露を尋ぬる秋の初風。(新古今)

- (五)うき世かな。いかにならまし。鈴蟲のたのみ山路に、みたてつなり。(拾玉)

○練習 (二)

左の例中にねける誤と正せ

- (一)獨逸てふ國にコッホてふ名醫ありて、ツベルクインてふ藥を發明したるてふ。
- (三)ゆく先を望み、來し方を顧みるに、たゞ雲烟に罩められたれ。
- (五)われは今日、いたく瘦まし人を見たり。
- (七)昨日地震ありし。
- (九)ひねもす雨ふりたれば、みてたこしたる(ツタ)。(桂園一枝)
- (十二)思ひいづる事も變らす事なれば、さめしきもなきわが寢覺かな。(桂園一枝)

- (六)かくればなじかはあるべきなれば、やがてふし倒れ、絶え入りけるこそむさんなれ。(源平盛衰)

- (二)春は來てける。
- (四)わが申せしこゝろ、ゆめ忘れ給ふな。
- (六)甲は、一切の事を、乙に任せし。
- (八)われは今日、友人の死を聞きて、世をば、はっなきよのこ思ふたり。
- (十)梓弓おして春雨今日降りつ。明日さへ降れば、若菜のみなん
- (十三)猫の手は鼠取るまでなりにけり。何にくらせし月日なららん。(桂園一枝)

六 否定助動詞

事物の動作を打消す助動詞なり

時	本助詞の	一	二	三	四	五	命令	俗	譯
現在	未然段	ず	ず	ず(じ)	ぬ(なく)	ね	○	ナイ	

(注意) 断止の「ず」を、推定に「じ」と云ふ。さうの「じ」は、「まけじたましひ」などの如く、體言に連なることあり。又、「こそ」の結もなる

又「こそ」誰にもえこそいひおすじ「心にかなふ命なられば」(詞花)

續體の「ぬ」を延音に「なく」と云ふ。但し延音は、つれに第一係の結となる。以下倣之

春の雨は彌繁降るに梅の花はまださかなく「いとわかみかも」(萬葉)

○今日「すは、明日は雪こそ降りなまし。消のすはあり

とも。花と見まじや。(古今)

○「ふ絶えず鳴けや。鶯。一とせに、ふた、びきたにくへき春かは。(古今)

もせぬ(古今)

○なすこちのたづきも知らぬ山中に。たはづかなくもよぶこ島な。(古今)

○春の夜のやみはあやなし。梅の花色こそ見えぬ「香やは

○ちはやぶる神代もきかず「龍田川からくれなゐに水くくるは。(古今)

○よし野山峰の白雪ふみわけて。入りにし人のねとつれ

かくるゝ。(古今)

○秋きぬせめにはさやかに見えれども。風のかきにぞたごろかれぬ。(古今)

現在	未然段	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ(よ)	ナイ
----	-----	----	----	----	----	----	-------	----

(注意) 「ズア」の約音なり

○花しあらば、何かは春の惜しからん。暮るこそ今日

はなげつざらまし。(後撰)

○えこそいなみ侍らざりつれ。(兼衣)

○朱雀院は御子たちにはしまさざり。(月宴)

○朝日影にほへる山に照る月のあつさる君を山こし

におきて。(萬葉)

○わか宿の草の上白くわく露の命も惜しからず。妹にあはざれば。(萬葉)

○あらせばや、と思ふ人のみうせはて、あらざれかしこ思ふ人のみ。(拾玉)

未來	断、止段	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	マイ
----	------	-----	-----	----	-----	------	---	----

(注意) 長行變格は、續體段を受く

○風吹くこ。枝をはなれて落つまじく花さぢつげよ。音

柳の糸。(山家)

○めづらかなる事ども。心もたごろくまじ。(尊木)

○あるまじき事はたほしめしながら。(栢木)

○練習(一)

次の誤文を訂正せよ

- (一) この戸押しもしなくにれのづから開きたり。
- (三) 豈喜ビザルベケンヤ
- (五) 彼は堪へまじき事にも克く堪へる人なり。
- (七) 愚人にはなるまじものと思ひける。

- (二) イマダ學ビズトイフトイヘドモ吾ハ必之ヲ學ビタルト謂ハン。
- (四) 天下の儒官に任する人の近く取り扱ふこと知らずまは申されまじきぞ。(明長洪範)
- (六) 知らぬ事は知らぬ。

○練習(二)

次に縦線を施せる『ぬ』は、決定なりや否定なりやを辨明せよ

- (一) 兵も盡きぬ。馬も斃れぬ。
- (三) 雨降り来ぬ。
- (五) 五人に廉耻の心あらぬ。苦なし。

- (二) 雨も降らぬに點滴あり。
- (四) 雨を降り来ぬ。
- (六) 雪降れば花さかぬ。木にも花さきぬ。

(七) 推定助動詞

事物の動作を想像する助動詞なり

時	本助詞の所屬語尾	一	二	三	四	五	命令	俗譯
未來	未然段	ませ	まく	まし	まし	ましか	○	マセウ

(注意) 自然決定の「な」、人為決定の「て」を附していひ得べし。  
 又、「ぞ」を結ぶ時は、命令、希求の意となることあり  
 見る人もなき山ささこの櫻花外のちりなん後ぞましまし。(古今)  
 又、「ませ」、「まし」を「ば」にて受けてかゝる時は、まほくは再び「まし」を結ぶを例とす  
 又、「このまく」を略して、「ま」のみもいふ。「見まほし」「見ま盡し」などの如し

○夢路にも宿す人のあらませば、ねさめに露はばらば  
 さらまし。(後撰)  
 ○梅の花ちらまく惜しみ、わが園の竹の林に蔭なくも。  
 (萬葉)  
 ○世の中に絶えて櫻のなかりせば、春の心はのどけから  
 まし。(古今)  
 ○年を経て見る人もなきふる里に、はらぬ松ぞあるじな  
 らまし。(後拾遺)

○敷ならば身に知られまし世のうさを。人のためにも  
らす袖かな。(夕霧)

○なごむにし花のちらすば。今日もたゞ春ゆくを。  
かりたり。(實之集)

そに見まし。(赤染集)

○山のはを見せましうば。春霞たてるも知らずんば  
かりたり。(實之集)

未來	斷止段	ぐく	ぐく	ぐし	ぐき	ぐけれ	○	ハ	ハ
----	-----	----	----	----	----	-----	---	---	---

(注意)

自然決定の「わ」、人為決定の「つ」を附していひ得べし。又、上一段活用は續用段をも受くる特例あり。但し歌なり。

白妙の浪路を遠くゆきひて我に似べきは誰ならなくに(土左)

又、良行變格は、必、續體段を受く

右近にあるべき事のためはせて渡り給ひぬ。(玉葛)

又、良行變格の「有り」を連續して「ハカヤ」の變化を生ず

又、漢籍に、許可の意の「可」を「ハシ」に訓ぜるより、轉じて後世これを命令に用ふること、なりたり

「ハ」を音便に「ハヤ」といひ、「ハキ」を「ハキ」と云ふ

○對面すべくたはかれ。(空蟬)  
○この歌もさくの如くなるべし。(古今序)

○あはれさもいふべき人はおもほえて、身のいたづらに  
なりぬべきかな。(拾遺)

○浪高し。いかに楳取、水鳥のうまれやすべき「猶や」  
ぐんや。(萬葉)

○曉のありさまを。なごしくもあふひれ。(枕草子)

現在	斷止段	○	めり	めり	める	めれ	○	トミエル	ヤウス
----	-----	---	----	----	----	----	---	------	-----

(注意)

自然決定の「わ」を附していひ得べし。但しこの助動詞は、おほくは他稱の主を有するが故に、おほく自稱の主を有すべき人為決定の「つ」とは連續せざるなり

又、良行變格は續體段に所屬す

石燈しかれて侍るめり。(金葉)

○尼君その程までながらへたまはんさ。のたまふめりき  
(若菜上)

○ちざりたきしさをか露を命にて。あはれこそしの秋  
もいぬめり。(千載)

○しりにけん。きてもいさへ。世の中は。涙のさわぎ  
に風ぞしくめる。(古今)

○木がらしにふきあはすめる笛の音を。ひきこむべき  
言の葉もなし。(待木)

○わざと。そくりはなつめれ「まがり木にはひまつはる  
る音つらなば。(夫木)

○いたづらにたびく死ねさいふめれば。逢ふには何を  
かへんすらん。(後撰)

未來	未然段	○	○	む	む	め	○	ツ
----	-----	---	---	---	---	---	---	---

(注意) 續體の「む」を、延音に「まへ」を云ふ

足引の山のもみぢにしづくあひてちらむ山ぢを君ウ（葉）

○秋霧は今朝はな立ちそ。佐保山の柝の紅葉よそにても

見む。(古今)

○しづくもて齡延ぶてふ花なれば、千世の秋にぞかげは

しけらむ。(後撰)

○よろづに見ざらむ世までを思ひたきてんこそ云云。(徒

然草)

○夕月夜たほづかなきを。玉くしげ二見の浦はあけて。

そ見め。(古今)

○たちちれの母がよぶ名を告らめども、道ゆく人を誰ぞ

知りてか。(萬葉)

又、自然決定の「な」を附して

未來	續用段	○	○	なむ	なむ	なめ	○	ナラウ
----	-----	---	---	----	----	----	---	-----

を生ず

君をたきてあだし心をわがもたば、末の松山浪もこえなん。(古今)

立田川紅葉亂れて流るゆり。波らば錦、中や絶えなん。(古今)

世の中のうき度毎に身をなげば、深き谷こそ淺くなりなめ。(古今)

又、人為決定の「て」を附して

未來	續用段	○	○	てむ	てむ	てめ	○	シヤウ
----	-----	---	---	----	----	----	---	-----

を生ず

たのめしこそ今はかへしてむ「わが身ふるればなき所なし。(古今)

ちりぬればこふれどまるしなきものを。今日こそ櫻折らば折りてめ。(古今)

又、「けらむ」を約めて

過去	續用段	○	○	けむ	けむ	けめ	○	アツタテ アラウ
----	-----	---	---	----	----	----	---	-------------

を生ず(けらむの本体は、過去なり)

涙川なに水かみを尋ねけむ」もの思ふ時のわが身なりけり。(古今)

たちちればかゝれきてしもわは玉のわが黒髪は、なですやありけむ。(後撰)

あふまでの形見きて。そそめけむ「涙にうちぶもくひなりけり。(古今)

但し、形状言の語根を受くる「けむ」「む」「む」の轉にして、こゝのさ違へり。形状言の續用段

より續けるにて、全くの未來なり。「へんあらむ」「の」「へんあらむ」「へんあらむ」なれるも、亦同じ

○櫻花ちらばをしけむ「玉ほこの道ゆきぶりに折りてかざらん。(新勅撰)

又、「にけん」「てけん」をいふべし

又、

未來	斷止段	○	○	らむ	らむ	らめ	○	ラッ
----	-----	---	---	----	----	----	---	----

を生ず。上二段活用は、續用段をも受くる特例あり。但し歌なり。良行變格は、必、續體段を受く。

袖ひぢてむすびし水のこほれるを、春立つ今日の風やさくらむ。(古今)

春たてば花さや見らむ白雪のかくれる枝に鶯のなく。(古今)

思ひやるかたも知られずくるしきは、心まごひの常にやあるらん。(後撰)

又、「ぬらん」、「つらん」といはるべし

未來	斷止段	○	○	らし	らし	らし	○	ラシイ
----	-----	---	---	----	----	----	---	-----

(注意)

この助動詞は「めり」と同じく、おほく他稱の主を有するを以て、自然決定の「ぬ」をば附すべしと云へども、人為決定の「つ」を附し難し。故に、その「らむ」と異なるを知るべく、又、「や」「つ」の結ぶなれる例、「二なきにあらねども、實は、いかにぞやあるとも知るべし

この助動詞、ふるくは「らしき」と活けり。「らしけれ」と活ける例はなけれども、そもく「形状言」の「けれ」といへる變化は、元來「かれ」の轉訛にして、ふるくは、すべて「けれ」といへる變化なく、

「こそ」を結ぶにも、皆續體段を以て結びたれば、この助動詞も、元來は形状言志久活の形式に活用せしものと知らる。體言を受けて、物の狀相似たるを云ふ助辭も、もこの助動詞と同一なるべく、落久保物語に「まるも今少し入らしくなりて」とあるにても知られぬべし  
所屬の特例は「らん」に等し

○立田川色くれなゐに成にけり。山の紅葉も今はちるらし。(六帖)

○この川にもみぢ葉流る。奥山の雪げの水ぞ今まさるらし。(古今)

○大君のつぎてめすらし高圓の野邊見るこゝにねのみしな(萬葉)

○松のねに風のしらへをたくへては、立田姫。こそ秋はひくらし。(後撰)

『なめり』は『なるめり』の省音なり。『なり』の「めり」に連続するは、良行變格特例の例なり。『かめり』は「…くあるめり」なり。『あめり』は「あるめり」なり。『ならむ』は「なるらん」なり。『たらん』は「たるらん」なり。『からむ』は「…くあるらん」なり。『ならし』は「なるらし」なり。『からし』は「…くあるらし」なり。『かからし』は「もらふ」。『ひらし』は「けるらし」なり。『ぎけらし』は「もみひひ」にけらし。『もみひひ』は「むしけらし」なり。『はらむ』は「はらむ」なり。『かむ』は「かむ」なり。『かむ』は「かむ」なり。



○練習

左の誤文を訂正せよ

- (一) 月は閉ぢられたり。われこれを敲きまし。
- (二) 郷里よりの郵書、今日は來へし
- (三) このころ、芥捨てへちらす。
- (四) さやうの事、決してありへちらす。
- (五) 彼は君子の人ともいひぬべし。
- (六) 峰の櫻は、雪とも見ゆるめり。
- (七) 柳葉に降る白雪は消えぬめる。神の心も今やさくらん
- (八) かつちこそ深山がくれのくち木なる。心は花になきはなりてん
- (九) 今日の初雪も、この朝日に解くるらん。
- (十) 奥山には夕立するらし。
- (十一) この雨に花もやう／＼はころばまし。

(八) 比較助動詞

同じ程に、彼と此とをたくらぶる助動詞なり

時	本動詞の	一	二	三	四	五	命令	俗	譯
	所屬語尾	い	く	し	や	や	や	や	や

現在	續體段	い	く	し	や	や	や	や	や
		い	く	し	や	や	や	や	や

(注意) この助動詞、語根のみも用ふ

又、體言をも受け、形状言をも受く。必しも、「の」を挿入すべきにあらず

- ひさかたの天見るこころ、まそ鏡あふきて見れど。(萬葉)
- その中に楊貴妃のまきはあまりさきまきすぎて。(大鏡)
- 世の中を何にたごへむ。朝びらきまぎにし舟のあまなきこころし。(萬葉)

「體言に所屬して、その體言を助詞または形容詞に變じ、又助詞を受けて、その意を助くる助辭あり。亦助動詞の類なり。今次にこれを記す

(一) 動詞狀をなすもの

所屬語	一	二	三	四	五	命令
體言	めか	めさ	めく	めく	めけ	めけ(よ)

(注意) そのままだに見ゆるを云ふ。「今めく」「ほのめく」なり云々。他動には

めかさ	めかし	めかそ	めかぞ	めかせ	めかせ(よ)
-----	-----	-----	-----	-----	--------

と云ふ。以下、自動なるは、左行に活用する時は他動となるべし

○まぐれて時めき給ふありけり。(桐壺)

○さりのこゑなごも殊の外に春めきて。(徒然草)

○唐めいたるよそひは、うるはしくこそありけめ。(桐壺)

○四十にもあまりぬる人の、色めきたるかた云々。(徒然

草)  
 ○姫君の御ありさまも、似つやはしく、よこめきなきも  
 あらぬを。(未摘花)  
 ○たはれいとやんごとなく、上手めかしけれ。(桐壺)

體	言	らが	らぎ	らぐ	らぐ	らげ	らげ(よ)
---	---	----	----	----	----	----	-------

(注意) その状態なすを云ふ

○くすりの女官にて、ふるのはよせ、あやうしだし、さいらを居たり。(紫式部日記)

形状言の語根	だ	だち	だつ	だつ	だて	だて(よ)
--------	---	----	----	----	----	-------

(注意) 意は、「だ」に似たり

○まばりたりしだし、まなまをまばりして侍るはごも。(紫式部日記)

動詞形状言の断止言	び	び	ぶ	ぶる	ふれ	び(よ)
-----------	---	---	---	----	----	------

(注意) その風する意なり。「宮ぶ」「都ぶ」「都ぶ」「また」「古るぶ」も云々。俗語に「大人ぶる」「學ぶる」「なまらふも」の語なり

○おなまびたるさくら、山ざらなははぶ。(徒然草)

○いさまるくこへ、いささびたる事なり。(徒然草)

○村鳥の立ちにしわが名、今更に事無しごも、まろしめらめ。(古今)

動詞續用段	ばま	ばみ	ばむ	ばむ	ばめ	ばめ(よ)
-------	----	----	----	----	----	-------

(注意) そのありさまのあらはるゝを云ふ。「なまむ」「黄ばむ」「なまむび、又」「老らばむ」「枯ればむ」「萎らばむ」「なまらふ」

○けしきばみそむかん、はた、なごがましかりなん。(雑木)  
 ○そばつきさればみたるも。(雑木)

形状言の語根	がら	がり	がる	がる	がれ	がれ(よ)
--------	----	----	----	----	----	-------

(注意) 思ふ心をあらはす意なり。俗語には「あはれがる」「不憫がる」など、體言を受く

○中將、わりなくおかしがれば。(芥木)

(二) 形容詞狀をなすもの

所屬語	一	二	三	四	五	命令
體	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞	動詞
動詞の綴用段	言	言	言	言	言	言
	たく	たく	たし	たき	たけれ	たかれ(よ)

(注意) 是は、萬葉に「振痛袖」さける如く、も「痛し」の義にして「うれたし」は「愛痛し」<sup>イラブシ</sup>とてたしは「愛痛し」の義なり。通じては希望をあらはす意に用ひらる

○さても勢たきつたに距ゆるし見るべきな。(芥木)

○いかになりさへ花やかに、めでたかりけんき。(大鏡)

○むかしの人にきかせ奉りたくて。(十六夜日記)

○家にありたき木は、松櫻。(徒然草)

○わが喰ひたき時、夜中にも、曉にも、喰ひて、ねぶりたければ、晝も、けいもりて。(徒然草)

詞體	動	動	動	動	動	動	動
動の未然段	言	言	言	言	言	言	言
	しく	しく	し	しき	しけれ	しかれ(よ)	

(注意) 事、物の状態を形容す。

たほくは、語を重ねて受く。「はなはたし」「けにげにし」「なほなほし」「勢々し」「思慮し」「まめまめし」「そばそばし」「ちぢぢぢし」「はらばらし」「ちぢぢぢし」「おろおろし」「おろし」「名だ」「映え映えし」「好き好きし」「汚の汚えし」など、古説にこれを「繁き」<sup>イサシ</sup>とせるは、いさ、あらん

○ありたき事は、まごころし書道の道。(徒然草)

○五月來ば、なきもふりなん。時鳥、未しき程のこゑを聞かば。(古今)

○わざわざしう、こころしう聞かれ。(大鏡)

○かひかひしくぞ、あへしらひ聞え給ふめる。(早歌)  
○公につかうまつるべき道々しき事を教へて、いさやげに、消息文にも、かんなさいふものを書きませす。うづら、しくいひまはし侍るに。(芥木)

體	言	言	言	言	言	言
	めかしく	めかしく	めかし	めかしき	めかしけれ	めかしかれ(よ)

(注意) そのさまに見ゆるを云ふ

○やうだい兒めがしう、かみしくし形またる人の云云。(紫式部日記)

體	言	言	言	言	言	言
	がましく	がましく	がまし	がましき	がましけれ	がましかれ(よ)

(注意)

「の如し」など云ふ意なり。俗語には、「悔りたまし」「奢りたまし」など、動詞状名詞を受く又、後世、訛りて「おほし」「おほふ」。源平盛衰記に、「みだりがはしく法皇を傾けまゐらせんこの御はらひ」など見ゆ

○起居のありさまの名たししく、なごましましなり。(十訓抄)

○つれづれわがなきくらす夏の夜、おほらたましき蟲のこゑかな。(幻)

動詞の未然段	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	○
--------	------	------	-----	------	-------	---

(注意)

是は「まく、ほし」の略音なり。自稱の主を有するを以て、命令にいひ難し

○見奉りては、くはしく御ありさま奏し侍らまほしきな。(桐壺)

助辭 (天爾乎波)

天爾乎波は、種々の言語の下に添ひて、其のことばの係るところ、結ばるゝところ、接続せらるゝところ、語氣の輕重、意義の離合等を示すことばなり

(注意)

てにをはト云フ名稱ハ、漢文訓讀ノなご點ヨリ來レルナリ  
天爾乎波は、語尾の變化なし。その結となるものは、通常第一係を結ぶ

(一) 係助辭

ことばの起首となる天爾乎波なり

所屬語	體言	俗譯
禮體	言	
動詞	段	
形狀言	續體段	
	は	ハ
	(斷止段にて結ぶ)	

◎彼と此と、事物を區別する意なり

○百千鳥さへつる春は物毎にあらたまれどもわれぞふりゆく(古今)

○波のわたしの今朝から殊に聞ゆるは春の調やあらたまらん(古今)

○ゆく水に教かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり(古今)

◎續用段を受けたるは、用言と用言とが連続せる中間に挿入せられたるなり

○さゝの葉にわく初霜の夜を寒みまみはつくも色にいでめや(古今)

◎次の例の如きは、成句を受けたるなり

○いにしへに(ありき、あらず)は知られども千させの例君にはじめん(古今)



續せる中間に挿入せられたるなり  
○筑波根の木のもも毎にたちぞる春のみ山のかけ  
をこひつゝ

○山あめもてする衣の赤紐の長くぞわれは神につ  
かふる(新勅撰)

『ぞ』に同じ

なん (『う』に同じ)

『ぞ』に同じ

◎意義、用法、すべて『ぞ』に同じ。但し『ぞ』  
は、多くは歌語にして、『なん』は、多く  
文章語なり。この語、ふるくは『なん』と  
云へり

○柿本人麿なん歌のひじりなりける(古今)  
○勅使きてその宣命よむなん悲しき事なりける(桐  
壺)  
○その方もぐしてうるさくなん侍りし(尊木)

動體  
形詞 續 體 言 段

や (續體段にて結ぶ)

ヤ

◎疑ひて問ひかくる助辭なり

○月やあらぬ春やむかし春ならぬわが身ひこつは

もこの身にして(古今)

○あはれなもいかに知りてかなぐさめんあるやこひ

しきなみや悲しき(夕霧)

◎續用段を受けたるは、用言と用言とが連  
續せる中間に挿入せられたるなり  
○春霞たつを見すて、ゆく雁は花なき里にすみつな

らふる(古今)  
○あはすしてこよひあけなば春の日の長くや人をつ  
らしむれもはん(古今)

動體  
形詞 續 體 言 段

か (續體段にて結ぶ)

カ

◎『や』と同じく疑問なれども、『や』は意重  
ひ、『か』は軽くして、大方然りと知らる。  
故に『何』の下には必『か』を用ひて、『や』  
を用ふることを、決して無し  
○蛙鳴く神南備川に影見えて今かさくらん山吹の花  
(新古今。萬。今や)

◎用言の續用段を受けたるは、用言と用言  
とが連続せる中間に挿入せられたるな  
り  
○あす川ゆきたむ岡の秋萩は今日ふる雨にちりか  
すぎなむ(萬葉)

動體  
形詞 續 體 言 段

こそ (已然段にて結ぶ)

(ガ)アノ

○「ど」よりも一層強く、事物を指示する助辭なり

○うゑしうゑは秋なき時やささらん花こそちらめ  
根さへつれめ(古今)

○續用段を受けたるは、用言と用言とが連續せる中間に挿入せられたるなり  
○あけたてば蟬のなりはへなきくらしよるは螢のもえこそ渡れ(古今)

### ○練習

左の誤文を訂正せよ

- (一)國の衰ふは悲し
- (二)うつくにはさもこそあらむ夢にさへ入めをもるさ見るのわびし
- (三)五人の内行の秘密にして往々世間に暴露さるゝものありが、る秘密は顯れて世に出つやまきはたカッゆるやまき

- (一)苗には秀づもあり秀でぬもあり
- (二)みだりに人にたはぶるぞわるき
- (三)小松が下に臥したる鹿のいかなる夢や見ららん(馬琴)
- (四)太郎さなんいへる見ありて次郎さ云へる見さ争へる

### (二)決定助辭

事物の動作ありさまをいひ定むる天爾乎波なり

所	屬	語		
體言、ねよび結ばれたる動詞、形狀言			かし (結)	俗 譯

- 然サカシし「然サカシ昔サカシもひなせサカシ云々(夕顔)
- こよなうひなきそふ心地サカシす(若菜)
- さびからすなごの上は見れき、いれなごする人世になしサカシ統サカシ草サカシ子(統草子)
- 石見サカシ鴻何サカシはしつらサカシつらサカシつらサカシはつらサカシみサカシつらサカシつらサカシに來

- ても見サカシふサカシ拾サカシ遺サカシ
- なサカシの感歎助辭を附して「さサカシなサカシ」とも云ふ
- さサカシへサカシしサカシなサカシ片敷く藤の衣手に涙のサカシる秋のれさめ(新古今)

體	言		
動	體	段	ど (結)
形	體	言	ツ ヨ

○花薄サカシまれサカシかばサカシにサカシさサカシまりサカシなんサカシいサカシつサカシれの野邊も遂サカシ  
のすみサカシかサカシぞサカシ(詞花)

○なサカシげサカシくサカシぞサカシよサカシ和歌の浦浪代々かけし跡を見るにも  
むサカシらサカシなる身サカシを(新續古今)  
多サカシクハ、コレナイヤシトシテ、サカシかなサカシト云ハ

(三) 推定助辭

事物の動作を推量する天爾乎波なり

所屬語		俗譯
動詞の未然段	(も) (緒)	ウ

◎是は古語なり。推定助動詞の「む」「に」等しきを以て、係は、第一をも、第二をも受く  
 ○人もがな見せも「きかせも」萩が花さく夕かげの

ひぐらしのこゑ(千載)  
 ○よそにのみ見てや渡らも「難波がた雪井に見ゆる鳥ならなくに(萬葉)

○練習

次の誤文を訂正せよ

- (一) 世間、往々さやうの事もあるまし。
- (二) わが身にのみは、決してさやうの事なきまし。

- (一) 雪うづむ松を縁にふきかへし見せもきかせも山おろしの風。(六百番歌合)

(四) 否定助辭

事物の動作を打消す天爾乎波なり

所屬語		俗譯
動詞の未然段	で	ナイデ

◎結にならずして用言につづく。若し終結にある時は、意もさへに還り、または省かれたるなり  
 ○きつてたれなましものを時鳥なつかくなりや夜半のこゑ(新古今)  
 ○ひさりのみながめてちりぬ梅の花知るばかりなる人はさひひで(新古今)

◎自然決定の「な」を附して「なで」「なぶ」  
 ○思へ君もえし烟にまがひなでたぢれくれたる春の霞を(新古今)  
 ◎感歎助辭の「も」を附して「でも」「ごも」  
 ○むすぶ手のしづくに濁る山の井のあがでも人に別れぬるかな(古今)

動詞の未然段	(に)	ナイデ
--------	-----	-----



○埴安の池の堤のこもりぬのゆくへを知らに舍人は  
まじふ。(萬葉)

○いへばえにいれば胸にさわがれて心ひさつにな  
げくころかな。(伊勢物語)

(五) 命令助辭

他に對して動作を課する天爾平波なり但し動詞の命令格はこれらの助  
辭を得てはじめて命令を完成するにわらずたゞその命令をたしかむる  
なり

所屬語		俗譯
命令格	よ(結)	ヨ

○久に經てわが後の世を問へよ「松跡忍ぶべき人も  
なき身ぞ。(玉葉)

○ほこりぎすこゝに近くな來鳴き(て)「よ」すきな  
む後にしるしあらめども。(萬葉)

○世にもらばたが身もあらじ忘れ(れ)よ「こふな  
よ」夢ぞ今はかきりに。(玉葉)

○感歎助辭の「な」を附して「よな」「こふな」  
○おすめよな「思ひ消えなん烟にもたぢぢくればは

んゆらゆらまじ。(狹衣)

命令格	や(結)	ヨ
-----	------	---

○聲絶えず鳴けや「終」こせにふたゝびさだに來べき春  
かは。(古今)

○感歎助辭の「と」を附して「やよ」「こよふ」古言格  
なり

命令格	な(結)	ヨ
-----	------	---

○霞みゆく難波の春の曙に心あれな「と」身を思ふかな。(爲家家集)

命令格	を(結)	ヨ
-----	------	---

○渡り守舟渡せな「と」よぶこゝのいたらねばももがちの  
たごせぬ。(萬葉)

○みすのうちにもものゝねきわく人もものし給ふらむが  
し。「こよひはさつきたと心」てな。(善火)

(六) 希求助辭

自稱より希望をいひわらはす天爾乎波なり。此の助辭命令に似て然らず。動詞の命令は、命令助辭を得て命令の意をなすにあらねども、希求は、これらの助辭を得てはじめて希望の意をなすなり。又命令は他に對して命令を課するを以て、その助辭皆命令格に所屬し、希求は、おほく自稱の主を有して、所屬の語尾、おのゝ、異なれり。

所屬語	俗譯
體言	アリタイ
狀言	
續用段	
言	
	もが (結)

○住の江の岸に家もが「奥に邊によする白浪見つゝしぬばむ。(萬葉)」  
○わが命長くもが「さひしたくみはや(書紀)」

◎「もがも」「もがな」「もがなや」「もがな」(接續)「ナリ」「もがも」「もがな」「もがなや」「もがな」  
かなる「もがも」「強調」「もがな」「もがな」  
人為決定の「て」を受けて、「もがも」「もがな」時は、動詞の續用段を受く

動詞の續用段	しが (結)	シ	タイ
--------	--------	---	----

○甲斐の嶽をさやにも見しが「けゝねなくよ」をりふせるまの中山。(古今)

◎「しがな」も云ふ。又、自然決定、人為決定の助動詞を附して、「しが」「しがな」「しがな」「しが」  
も「しがな」「な」

動詞の未然段	ばや (結)	タ	イ
--------	--------	---	---

○今しばし生きてあらばや「と思ふ(落久保)」

◎「ばやな」「なばや」なと云ふ

動詞の未然段	な (結)		ウ
--------	-------	--	---

○白浪の千重に來よする住の江の岸のはにふにはほひてのな(萬葉)

○自然、人為の決定を附して、「なな」「てな」も云ふ

動詞の未然段	なん (結)	テ	アレヨ
--------	--------	---	-----

(注意) 是は對稱、他稱の主を有すれども、その希望は、猶自稱より云ふなり。「ななん」も云ふ。但し「てなん」も云はす

○惟光、さくまねらなんと云はす。(夕顔)

○夕暮の籬は山と見えななん」よるは「こえじとやざりさるべし。(古今)

動詞の未然段	ぬ (結)	クダサイ
--------	-------	------

(注意) 續用段を受くるは、決定動詞の命令格なり。混ふな。又、ふるくは「に」も「され」も云ふ

○あがまのみたま給ひて春さらばならの都に召上たまはれ。(萬葉)

動詞の未然段	ぬか (結)	ホンシイカ
--------	--------	-------

◎感歎助辭を附して「ぬかも」「ぬかな」も云ふ

○久堅の雨も降らぬ、雨つ々み君にたぐひてこの日くらさむ。(萬葉)

動詞の續用段	(こそ) (結)	クレヨ
--------	----------	-----

◎轉じて「こそ」も云ふ。「なれば」も云ふ。又、前の「な」を重ねて「なれば」「なれば」も云ふ

### (七) 禁止助辭

他に對して、事物の動作を「勿れ」と制止する天爾乎波なり

所屬語	な (結)	俗譯
動詞の(續)止用段	ナ	

◎動詞の上につくも、下につくもの二様あり。その下につくものは斷止に所屬し、その上につくものは古言の格にして、續用段の上に置く。然るに後世は、この古

○妹があたりわが袖ふらむ。木の間よりいでくる月に雲なたなびき。(萬葉)  
○忘れなんわれを恨むな」時鳥人の秋にはあはんこもせず(古今)

格に決定助辭の「そ」を附して云へり。  
但し「そ」を清音に訓むべし  
加行、佐行の二變格は、上なるには、未  
然段に連なり、良行變格は、下なるには、  
續體段を受く

○涼しきは生の松原まさることもそふる扇の風な忘れ  
そ(新古今)  
○今はなまうでこそ(後撰)  
○見咎むべき事わざなせそ(續紀)

(注意) 是は「な」に禁止の意ありて、「そ」は決定なり。故にその「な」を除きては、禁止の意をなまず  
又「なよ」「な( )そよ」「な( )そや」「な( )それ」なども云ふ

○練習

次の誤文を訂正せよ

- (一) 人は世に語はなでもあるべし
- (三) この事早く彼に知らさばや
- (五) 伊勢の海のかきつ白浪花にがもつゝみて妹が家づみにせん(新勅撰)
- (二) 今年は櫻早くぞ咲かなん
- (四) 益飛ぶればるの清水かすかにも知らばやたのがもゆる  
思ひを(續千載)
- (六) このよるこびを外へは遣りそ

- (七) 強きとて身をば頼みそ
- (九) 師の訓戒を忘れるな
- (十) 惡戯をなしそ

- (八) 師の訓戒を忘るゝな
- (十) 師の訓戒を忘れな

(八) 疑問助辭

動作形状のうたがはしきをいひあらはそ天爾乎波なり  
(注意) 係なるは、(一)係助辭の部に擧げたり。茲にはその結となるものを取る

所屬語	俗譯
形動 狀言 詞 斷 止 段	や (結) ヤ

◎「何」の下に用ひざる事、(一)係助辭の部に云へるが如  
「何ぞ」「なんぞ」

○名にしたは、いさこころは入都鳥わが思ふ人ばかりや  
なこや(古今)

禮體言	禮體言
形動 狀言 詞 續 體 段	か (結) カ

○春雨のふるは涙か「櫻花ちるを惜まぬ人しなければ。  
(古今)

○思ふべきわが後の世はあるか「なきか」なければこそ  
は「この世にはすみ」(新古今)

○『かや』と「ふ時の『や』は感歎助辭なり

### ○練習

次の誤文を訂正せよ

- (一) わが聲は君に聞ゆるや「わが姿は君に見ゆるや
- (二) さるこそあるや「なきや」われは知らず
- (三) 棟梁の花には實あるや「なきや
- (四) 七何を見あやまりたるにや「今昔物語」

- (一) 來るや「來るや」こまてても更に來ぬ
- (二) わが命今日は死ぬか「明日は消ゆか
- (三) 曹達と「ナトリウム」を等し

### (九) 反動助辭

事物の動作形状をうらうへにいひわらはと天爾乎波なり

所屬	言		
係	結		
體言。動詞形状 言の續用言	動詞形状言の斷 止段	や (係) (結)	俗譯 ヤ

○係となりて續用段を受くるは、用言と用言とが連続せ

る中間に挿入せられたるなり

多くは感歎助辭を附して「やは」を云ふ

又結には

未然段	めや(は)(も)
斷止段	らめや(も)
續用段	けめや(も)

こも云ふ  
又、勸告の意、漢字の「蓋」の意を心得てもよきなり  
あり。

○秋の田の穂の上を照らす稲妻の光の間にもわれや  
忘るゝ(古今)

○信濃なる淺間のたけにたつ烟をちこち人の見やは  
こがめぬ (新古今)

○諸共に鳴きてこめめよきりたす秋のわかれば惜  
しくやはあらぬ(古今)

○諸共にたきぬし秋の露はかりかこちんものこれも  
ひかけきや(後撰)

○大和こひいのれらえぬに心なくこのすのさきにた  
づなぐへしや(萬葉)

○色さいへばこきもつすきもたのまれず大和撫子ち

時鳥聲もきこえず山彦はほかになくれをこたへや  
はせり(古今)  
の類の(こし)

る世なこは(後撰)

係	結		
體言	體言。動詞形状 言の續體段	か(係)(結)	カ

◎感歎助辭を附して「うは」こまふ  
又、結には

未然一段 (めい) (も)

こまふ

- つれならばあはアツへるもなげかじを都いつこ人の  
つけける(後拾遺)
- うき世をばそむひは今日もそむきな入明日もありこは  
たのもへき身(拾遺)
- 悲しさをうけ思ひもなぐさめよ誰も迷にはこまる  
きつは(千載)

○練習

- (一)いにしへをあふきて今なこひさらめかも(古今序)
- (二)もみぢ葉も時雨もつらしまれに來て歸らん人をふりや  
こころぬ(後撰)
- (三)ちぎりけん心ぞつらき棚機の年に一たび逢ふは逢ふか  
は(古今)
- (四)春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見ぬれ香やはか  
くる(古今)
- (五)うちつけのわかれを惜むかこにて思はんかたにまた  
ひやはせぬ(深標)
- (六)今日こそは明日は雪こそ降りなまこすはありとも  
花と見まじや(古今)
- (七)秋なれば山よむまてなく鹿にわれをこらめやひこり  
ぬる夜は(古今)
- (八)よき人はしりたる事こそこのみ知りかほにやはいふ  
(徒然草)

(十)感歎助辭

喜怒、哀、樂等の感情をいひあらはす天爾乎波なり

所屬語		俗譯
體動形	言詞續體段	よ(結)
狀		ヨ

◎否定助動詞の「ず」よりは、斷止段を受くる特例あり  
 又、呼出しにも用ふ  
 又「ぞ」「こそ」の結を省きて受く  
 又、續體段をば、結ばれたるをも受く  
 又「こそ」「こそ」「よな」「こそ」云ふ

○この頃のなしのうきれぞあはれなる上毛の霜よ「下の氷よ(千載)」  
 ○人には木のほしのやうに思はるゝよ「云云(徒然草)」  
 ○忘れずよ」又かはらすよ」瓦屋の下焼く烟下むせびつ  
 つ(實方集)  
 ○秋の夜の月毛の駒よ」わがこふる雲井にかけれ時の間も見ん(明石)

體	言
結ばれたる動詞、形状言	
や (結)	ヨ

◎呼出しにも用ふ  
 又「やな」「こそ」云ふ  
 又「あな」「こそ」云ふ歌詞を上に置き「の」を受けて結ぶ  
 こと多し  
 ○昔人は花や「蝶や」といそぐ日もわが心なほ君ぞ知りける(枕草子)  
 (注意) コソ「や」接続ニアラス。箇々ニ附ス

○耳をいめてぞかこしめ給ふや。(常夏)  
 ○こゝろあなまきしや(宇津保)  
 ○わざも「や」あなわますすな石上袖ふる川の絶れももも「や(萬葉)

體	言
結ばれたる動詞、形状言	
な (結)	ナア

◎結ばれたるを受くるは「よ」に同じ  
 ○うへな「うべな」君まぢがたに(古事記)

○さすかにあそばしたる和歌はいつれも人の口にはらぬなく儼にこそうけたまはれな(大鏡)  
 ○ものとしてばかりがたしな「よわき水にたもき舟しもうさぶされもへば(風雅)

結ばれたる動詞、形状言	
も (結)	マア

◎「よな」「よも」「よよ」「よよ」云ふ。古言格なり  
 ○朝びらき「よを」ぞくればむの浦のしほひのかたにたつが聲も(萬葉)

○津邊より雲井をきてゆく雁のいやとほさるわが身かなしも(古今)

體	言
形動	
狀	
言	
續	
體	
段	
言	
か (結)	チャナア

◎感歎助辭を重ねて、古くは「うも」後には「うな」も云ふ。猶「うも」「うな」もなほ「も」「いひ」、又、ふるくは「うも」「うな」なり

○淺緑糸よりかけて白帯を玉にもりける春の柳（古今）

○女郎うしろめたくも見ゆるうなあれたる宿に獨たれば（古今）

○まつ人にあらぬものから初雁の今朝鳴くことのためうらしきうな（古今）

◎古格には斷止段を受くる特例あり

動詞、形狀言の續體段	は	（結）	り
------------	---	-----	---

◎「は」と「も」「いひ」は「も」を重ねていふ又。結ばれても受く

○ちかき皇胤をたづねば融等も侍るは（大鏡）

體言の續體段	を	（結）	ヨ
--------	---	-----	---

◎重ねて「なほ」「こもいふ」

○八雲たつ出雲八重垣つゞきこみに八重垣つくるその八重垣を（古事記）

動詞、形狀言の斷止段	（急）	（結）	ヨ
------------	-----	-----	---

◎重ねて「なほ」「こもいふ」

○山のはに味村さわかおくなれこ音はおしよ「君にしあらば（萬葉）

○練習

- (一) さればこの宮をば立て奉るなり、とればせられける（ぞ）この當代の御事（よ）（大鏡）
- (二) われこそは、新島守（よ）隱岐の海の荒き浪風心して吹け。（増鏡）
- (三) 櫛匂の鎧に蝶の裾金物打ちて、黄鶉毛の馬に乗りたる（こそ）重盛（よ）（平治物語）
- (四) 後夜の御加持に御ものゝけいで来て、かう（ぞ）有る（よ）。（柏木）
- (五) 櫻花山路も見えずちりにけり。これより春はくれゆく（か）と（よ）（堀河百首）



- (六) 長月の九日毎はつむ菊の花のかひなく老いにける『よな』。(拾遺)
- (七) 入道相國あべのすけなりを召して院の御所に参り大膳大夫のふ成をよびいでんきつと申さんする事は『よな』新大納言成親卿以下云云。(平家物語)

(八) 櫻などのちるも世の常なり『や』。(枕草子)

(九) うゑ木は根をねはしてつくろひたてつればこそ枝も葉もしげりて木の實をもむすべ『や』。(大鏡)

(十) よからずの右近がさま『やな』。(浮舟)

(十一) いかにせんあなあやにく(春の日『や』夜半のけしきのかゝらましかば。(拾遺)

(十二) ちぎり(き)『な』かたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじとは。(後拾遺)

(十三) かれぞこの常陸の守のむこの少將 『な』。(東屋)

(十四) わたの原よせ来る浪のしばしも見まくのはしき(王津島『かも』。(古今) (十五) 『くやし』『かも』かくしらませば青によし國內ことく見せましものを。(菟葉)

(十六) 内致坊内侍所のはどにかゝるものども(のある『はや』。(未摘花)

(十七) めやすき朝臣のめを(なん)さだめさなる『はや』。(東屋)

(十二) 餘情助辭

ことをそこにとりめてなほ餘意あるべく知らしむる天爾乎波なり

所 屬 語	動 詞 の 續 用 段	俗 譯
	つゝ(結)	テ#テ

◎この中間にありて下の事からの記載せられたるは、餘情助辭にあらず。下に出づ

○梅が枝に来ぬる鶯春かけてなげどもいまだ雪は降りつゝ。(古今)

形動	狀	言	續	體	段		
						に(結)	ノニ

◎「こそ」の結ともなる  
 ○「わ高になのたまひそ屋のうへになる人ごもの聞  
 くに(竹取)

○いにしへは月なのみこそながめしに「今は日なま  
 つわが身なりけり(金葉)

形動	體						
狀	言	續	體	言	段		
						を(結)	モノヲ

◎「こそ」の結ともなる

「よのを」をいふべきを、「を」を省きても云ひ、又、感  
 歎助辭を附して「よのをぞ」をいふ

○秋の菊にほふがざりはひさしてん花よりさきさ知  
 らわわが身を(古今)

○雪さのみふるだにあるな「櫻花いかにちれさか風  
 の吹くらん(古今)

○梓弓ねさきくわれもねほに見し事くやしきを

櫻かな(續古今)

○天飛ぶや鳥にもがもや都までおくりまをして飛び  
 かへるもの(萬葉)

○故宮のいさやんこそなくればしききめかし給ひし  
 ものを(葵)

○絶えずこそ仕へしものを「わが身世になごよむ  
 らん關の藤川(新千載)

○白川の瀬のいさ見まほしけれさみだりに人をよせ

(萬葉)

○したにこそ人の心もうつろふを「色に見せたる山

じものを(後撰)

(三) 強調助辭

ことばの中間にありて調をととのへ意を強くする天爾乎波なり係とも  
 結ともなることなし

所	屬	語			
			し		
				俗	
					譯
				ソレガ	

◎體言に所屬して、意を次に續かしむ

大空の月の光し清ければ影見し水ぞまづこほりける  
 (古今)

◎動詞の切れたることばを受けて、意を次に續かしむ  
 梅の花ちらす風のれさのみにきしわきもを見らく

しよしも(萬葉)

◎動詞、形狀言の續用段が次の動詞につゞける中間に挿  
 入す

ここのねはなぞやかひなき榊のあかめわれをひ  
 きしとめれば(拾遺)

時雨の雨間なくしふれば三笠山こねれあまねく色づきにけり。(萬葉)

◎重れ語の中間に挿入す

うらふしうらば秋なき時やささらん花こそちらめ根さへつれめや。(古今)

◎「も」の感歎助辭を附して、「し」も「こ」もに強調助辭なる

あまた見し豊のみそぎのもろ人の君しも物な思はまらふな。(拾遺)

◎係助辭の「も」「に」「の」「し」のなほ「や」「の」を強ひ易し。

心せよ

きくにだに心はうつる花の色を見にやうはたはた

(し)もせじ。(後拾遺)

◎「し」も「こ」もに強調なるは、係の「こそ」に通ふことあり

時しもあれ秋やは人のわかるべきあるを見るだに、

ひしきものを。(古今)

かゝるは約めて「時生まれ」「君生まれ」「折生まれ」

など云ふ。但し歌なり

形動體	言	
狀	續	
用	段	
を		ソレヲ

◎あさりするあまさを見ませ草枕旅ゆく人につまこはのらじ。(萬葉)

◎君がゆきけ長くなりぬやまたつのもかへをゆかまづにはまたじ。(古事記)

動詞の續體段が體言につづく中間		や	ソノ
-----------------	--	---	----

◎春の野に鳴くや鶯なづけむさわがへの園に梅の花はつ。(萬葉)

動詞の續體段が體言につづく中間等	(5)	
動詞の斷止段	(3)	

(三) 接續助辭

上下の語句を連續せしむる天爾乎波なり

所屬語		俗譯
體言、結ばれたる動詞、形	と	ト
狀言		

◎ここを並べていふ時は一々附す

流れ水ミ立つ白浪ミ焼く鹽ミいづれつらきわたつみの底。(新古今)

若し歌にわいて一方を省かんとならば、初なるなげ音

く。今の俗語と反對なり

青柳梅ミの花を折りかざし飲みての後は散りぬ

もよし。(萬葉)

◎切れたるを受く

千はやぶる賀茂の社の姫小松萬代ふもも色はかはらじ(古今)

かくばかりをしと思ふ夜を徒にねてあつすらん人さへぞうき(古今)

こちここといひて文をとり見れば(大和物語)

◎歌にはまれくに體言を書きて受くることあり。書きて然問ゆる時のことにして、結ばれざるを受けたりと思ふなけれ

日のうちにふたしびものを思ふかななくあけぬる(トキ)をおそくくる(トキ)の拾遺

◎續用段を受けたるは、重れこまばの中間に挿入せるなり

いさぎいきてたちかへらんも心ぐるしなごればしわづらふ(蜻蛉)

◎「トイヘドモ」の意なる  
繪にゆく筆も及ばじ少女子が花の姿をたれに見せまし(瀬河後百首)

◎「トナリテ」の意なる

世の人はつらき心ぞありあけの月と山にや入りまなまし(六帖)

◎「ノコトク」の意なる

梅の花み山としみにありともやうのみ君は見れあつにせむ(萬葉)

◎切れたる章句を受く  
落くばの君の手にこそこのたまふこは誰を云ふあやし人の名や(落久保)

◎「又」もを附してこもと云ふ時は「トイヘドモ」の意にもなる。この時は、必、斷止段を受けて、たこひ上に

「ぞ」「こそ」の係ありとも、その結は斷止段に轉じて所屬せしむ。體言を受けず。上一段活用は、續用段を受くる特例あり。但しこの特例は歌なり

君が代はかぎりもあらじ長濱のまさこの歌はよみつくまこも(古今)

姿こそそれぞめの床に見ゆすとも契りしここの現なり

◎「トイテ」の意なる

わが袖はひくさぬらしつあやめ草人の袂にかけてわがせ(蜻蛉日記)

◎「トシテ」の意なる  
沖津浪來ゆる荒磯を敷妙の枕こまきてなせる君も(萬葉)

せば(千載)

萬代に見ともあかめやみよし野の瀬津河内の大宮こる(萬葉)

◎「サリ」に終結して、意をもとに還し、又、後を省く  
鏡山いとたぢより見ててゆかん年經ゆる身はわいやはしめるこも(古今)

形動 詞 已 然 段

終 結

○さへる山ありまはきけ春霞たちわかれなばこひこふるこ(古今)

◎「シホ」の意なる  
百千鳥さへる春は物毎にあらたまれもわれぞふりゆく(古今)

◎「サレ」を結入るものは、「サレド」を心得し  
心ぞよき世の岸を離るれ(サレ)とゆへも知ら

ぬあまのうき木を(手習)  
信濃なるそのはらにそあられ(サレ)とゆわがははき木こ今はたのまん(後拾遺)

◎「サリ」に終結す  
月見れば千々に物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあられこ(古今)

形動	詞	續	用	段			
状	言	體	體	言	て		テ

○わがせを都に遣りて鹽釜の籬の鳥のまづぞこひしき。(古今)

かく動詞を受くるは、決定助動詞の續用段と云ひてもあるべけれども、茲には猶、形状言をも受くるを以て、別に一種の接續助辭とぞ

○近くて遠きもの(枕草子)

○上に「ぞ」なん「こそ」等の係ありても、猶、その結は續用段に轉じて受けしむ

まかん。なんのたまひて心に入れぬぞとさいなむと云へば。(落久保)

○「ても」さひて、「タリトイヘドモ」の意ともなる

いつまでか涙くもらで月は見し秋待ち得ても秋ぞこ

ひしき(新古今)

○「ニシキ」を「に」し。「アミテ」アノロテ「ト」ヒニナシを「て」云ふ

思ひつ、經にける年をこるへにてなれぬるものは心なりけり(後撰)

然りて背かれなくに事しあればまづ歎かれぬあなう世の中(古今)

吳子孫子六韜三略などこそ然るべき常用の文なれとて昌黎文集の談義を止めてけり(太平記)

○假りに終結とす

大方の秋のれさめの長き夜も君を祈る身を思ふとて(新古今)

形動	詞	續	體	言	は		ハ
状	言	體	體	言			

○是は「係助辭にいてたるものに等し若し。上に「ぞ」なん」の係あるものは「サレハ」の意なり

殘る松さへ峰にさびしきさひへる歌をぞいふなる(サル)は誠に少しくだけたる云(徒然草)

○「ニン」の意なるあり

さみだればみつの御牧のまごも草刈りほすひまもあらじこそ思ふ(後拾遺)

○假りに終結とす

ありてははれさせざるべき津の國の今を生田の森といひしは(イカニセシソ)(後拾遺)

形動	詞	續	體	言	も		モ
状	言	體	體	言			

○是も「係助辭にいてたるものに等し若し上に「ぞ」なん」の係あるものは「ソレモ」の意なり

いみじうたはしむわぎて御すきやうならあまたせはせ給ひてそなたに對ひてなんれんじくらすせ給ひけ

る「ソレ」もすきくしくあはれなる事なり(枕草子)

○假りに終結とす

題しらすよみ人も(シラズ)(後撰)

形動	詞	未	然	段	ば		(ウナラ)バ (タ)ソコデ
状	言	已	然	段			

○未來の「ハ」

○過去の「ハ」

○梓弓あしゆまにして春雨今日降りぬ明日さへ降らばわかな  
つみてん(古今)

○鶯の谷よりいづる聲なくば春くることを誰か知ら  
ま(古今)

◎假りに終結す

現にはさうにもいはじ夢にだに妹がたもさをまきぬ  
とし見ば(サレシカラマシ)(萬葉)

○霞たち木のめも春の雪ふれば花なき里も花ぞちり  
ける(古今)

○なきまむる花しなれば鶯もはてはものうくなり  
ぬ(らなり)(古今)

◎上に『ぞ』なん』の係ありても猶その結をば自然段に轉  
じて受けしむ

朝綱が家は二條と京極になんありければ東の河原  
はるかに見ぬ渡りて(今昔物語)

◎若し『こそ』の結を結びてうけたるあらば『サレヌ』の意  
さ知れ

われこそ知りたれ(サレ)ばいさ給へあはせまむら  
せん(宇治拾遺)

◎ウリに終結す

花見てそ世のうき事も忘らるゝ春はさきりのなから  
ま(ウリ)ば(サレシカラマシ)(後拾遺)

○山近みめづらじげなくふる雪のまろくやならん年

つもりなば(後撰)

◎自然決定の「な」を附して「なば」と云ふ。未來なり

時雨ふりふりなば人に見せもあへすちりなば惜しみ  
なれる秋萩(後撰)

◎人為決定の「て」を附して「てば」と云ふ。未來なり

梅が香を袖にうつしてさめめてば春はすぐとも形見  
ならまし(古今)

◎「せば」動詞の續用段を受く。未來なり

わたつみに深き心のなかりせば何うは君をうらみし  
もせん(後撰)

○秋萩にはほへるわが愛われぬとも君が御舟の綱し  
きりては(メルトモイトハシ)(萬葉)

(注意) この「てば」に混する「ては」「あり」「サレ」

後ハ「の意にて、時と半過去なり。」「は」  
を濁らす。故に未來の「てば」は、推量  
疑問、命令等にて結び。「ては」は決定  
の意にて結へり

みちのくにありといふなる名取川なき名取りてはく  
るし(ウリ)けり(古今)

○棚機たなぐりの逢ふ夜の敷のわびつこも来る月こそこの七日

なりせば(サレシカラマシ)(後拾遺)  
◎微管仲吾其被髮左衽矣(論語)の「微」を「サカッセン」と  
訓むは、音便なり



動詞	續	體	段		
形状言				が	ソレガ

◎用言を受けて、體言、また用言に接す。「の」「を」はれざるに注意せよ(直接マタハ間接ニ)

今上一の宮まだわらはにておはしませしが御おぢに  
(枕草子)  
いとやんごとなききはにはあらぬがまぐれて時めき

給ふありけり(桐壺)

◎「ぞ」の結をうけたるは、猶ソレガ「さきくべきなりひはだやを現じてぞ見せける」(ソレ)「ままこにはなかりけり」(古今著聞)

◎この助辭の下に、名詞の主格あるはひがこさなり

○練習

左の誤文を訂正せよ

- (一)霞みつゝくるゝと思ひし春の日は朧月夜になりけるかな(桂園一枝)
- (三)いづるこも入るこも見えて足曳の山ののをへにすめる月かな(續後拾遺)
- (五)たまこひ聖人君子までこそかなはぬこもせめては埋もれ

- (二)「まのこる」は何の心もなかりけり何の心かありと尋ねん(桂園一枝)
- (四)某氏今日某所に於て學術演説をするこぞ
- (六)行ふて餘力ある則は以て文を學ぶ

ぬ名をだに世に残さばや

- (七)人に媚ぶは見苦し
- (九)かこらんと疾くより知らせば又せんやうもありしものを
- (十)ものへ似ずあはれなり
- (十一)花見に行きしが花はいまだ咲かず

若しよく精密に見れば猶誤もありん

- (八)若しよく精密に見れば猶誤もありん
- (十)出づに車あり寝ぬに家あり
- (十一)舟を左にむけて岸へ達せり
- (十二)翁その人を久しく相知りしが其の子九十郎といふもの十五歳の時云云(駿臺雜話)

(十四) 連體助辭

體言と體言とを連續する天爾平波なり故に、動詞、形状言を受くることなく、又係とも結ともなることなし

所	屬	語			俗	譯
體		言	の			ノ

○今もかも咲き匂ふらん橋の小島の崎の山吹の花(古今)



◎動詞、形状言の名詞法を受けく

身のうきに思ひあまりのほてくは親さつらきものにぞありける(玉葉)

ふしわびぬまの、小篠のかり枕は、うなの露や一よばかりに(新古今)

◎決定助動詞の「て」「し」、推定助動詞の「む」「む」、否定助動詞の「ず」を受ける特例あり

まのぶと思ふらんをあらはさむの心にて(紫日記)

むねいたき目をや見むのは、かりに(東屋)

いきての世死にての後の後の世もはれなはせる鳥となりなん(玉葉)

體	言	が	ガ
---	---	---	---

◎萩が花ちるらん小野の露霜にぬれてをわかむ小夜はふくとも(古今)

◎接續すべき上下の體言の間にこそを挿むは、おほくは歌の上なり

注)

◎「の」「も」「が」「も」共に持主格なり云々「も」「が」「も」「が」は動詞をも受くること、(接續助辭に云へるが如し)

體	言	つ	ノ
---	---	---	---

◎さゝ、浪の國つ御神のうらさびてあれたる都見ればかなしも(萬葉)

體	言	や	ノ
---	---	---	---

◎大より小に及ぶ意なり  
いざこゝにわが世は經なん菅原や伏見の里のあれま  
くも惜し(古今)

◎間にこそを挿む。歌の上なり  
葛城や(われやは)久米の橋つくりあけゆくほどにも  
のなこそ思へ(拾遺)

○練習



體言	止	段言	ばかり	ガ ケ 井
動詞	斷			
形狀言				

◎其行變格は、續體段を受く

◎是は、もを計る「も云ふ語より轉じて、助辭となる

にて、續體段を受けたるは、歌に於て體言を省けるなり

○せんざいの菊の露にほるばかりぬれかりたるも  
いさをさし(枕草子)

○うちつけにこしとや花の色を見んかく白露のそむ  
る(ワサ)ばかりを(古今)

體言	體	段言	ヨリ	ニヨリテ
動詞	續			
形狀言				

から

○いづるからわひる、まきは山の井の濁りしよりも  
わびしがりけり(六帖)

は、「ものゝま」ものゝまに「を同じへ」、「モノナガラ」  
の意となる

體言	體	段言	より	カラ
動詞	續			
形狀言				

◎古言には「よこいふ。猶」の「のり」の如し

○風をいたみ下葉の上になりしよりうらみて物な思  
ふ秋萩(和泉式部家集)

◎又、「ナ」「ニ」「ハ」「ニチ」「ノホカニ」等の意

となり。又、比較の意となる

◎又、否定助動詞の「ナ」よりは、斷止段を受くる特例あり

體言	體	段言	まで	マ カ テ
動詞	續			
形狀言				

○冬来ては一夜二夜を玉ざの葉分の霜のまころせ  
ままで(千載)

◎加行變格は、斷止段を受くる特例あり

體言	止	段言	ながら	ツ ソノ マ ト ハ イ ヘ ド モ
動詞	續			
形狀言				

◎「ツ」の意なるは動詞の續用段を受け、「ソノマ」の意なるは體言を受け、「トハイヘドモ」の意なるは體言及動詞  
形狀言の斷止段を受く。又、續體段を受けたるは、體言の省かれたるなること。(其の「も」及「並」の「はかり」に  
れけ  
るが如し

體	言	こと	オノノ
動詞の續用段	言	がて	ガタク
動詞の續用段	言	がてら <small>古言「がてり」</small>	ガタク ガタ(方)
體	言	がり	ガテラ
動詞の續體段	言	すがら <small>(まみら)</small>	ノモト
動詞の續體段	言	まに <small>まにまに</small>	ソウテ
動詞の續體段	言	(がね)(結)	マ、
動詞の斷止段	言	(がに)	タメニ
體	言	(しき)	ハカリ
動詞の續體段	言	(なま)	キツト
動詞の續體段	言	(もころ)	ゴトク
體	言(人)	(こそ)	サマ

「の」を附するは、ひがこなり

### ○練習

次の誤文を訂正せよ

- (一) 鶯の鳴きてさむむる聲をさへものとも聞かで春は行くらん(桂園一枝)
- (三) 柿ふく風もゆふべはのどつにてかぞふるばかりちる櫻かな(桂園一枝)

- (二) 牧民の要はたゞ民をあはれみ民を撫づのみ
- 四(全軍の亡ぶまで)戦へ
- (五) よばぬながらも聖人君子とあるを望め
- (六) わが身弱きながらなほかばかりのわざには堪ふべし

### 名詞

名詞は形體の有無を問はず、惣べて事物の名を呼ぶことばなり

固有名詞、普通名詞、抽象名詞、集合名詞の區別。數の單複。性の男女。等は、代名詞、動詞との關係上、さしたる必要なし

動詞の續用段より來れる動詞狀名詞、および形狀言の語根より來れる名詞は、ともに名詞なり

熟語名語の下の語の頭首は、多く濁りて訓む。濁るべきを濁らざれば、各、別の事物となるべし

みづから言ふを一人稱(自稱)といひ、他に對して言ふを二人稱(對稱)といひ、  
他を言ふを三人稱(他稱)といふ。事物には、第一稱、第二稱、第三稱と云ふべし。  
動作の主を主格と云ひ、動作を受くるを賓格(目的格)と云ふ、又、連體助辭に  
て連続せられたる名詞の上なるを持主格と云ふ。これらの格は、その所屬  
の助辭によりて判別す。

動詞助動詞は、多く人稱の差別に關係なし。但し、命令は二人稱にのみ限り、  
希求は多く一人稱に關す。又、推定の『らし』の、一人稱に關せざる如きあり。

若し、これを一人稱に關聯する時、又、一人稱に命令ある時は、自己を三人稱、又は、二人稱させるなり。  
名詞を活用する例。さうぞく(裝束)。まつりごつ(政)。ひざりごつ(獨立)。しつらふ(室禮)。かいまむ(垣  
間)。さうぞく(騒動)。ばらむ(脛)

### 代名詞

代名詞は、事物の名のかはりに用ふることばなり。

人稱は名詞に同じ。但し、代名詞は、不定なるものをも指すを以て、不定稱あり。その他、數、格、性のこと。

名詞に等し

人	一人稱 (第一稱)	あ われ あれ	わ われ われ	おの おのれ おのれ	なにがし み このほう	まる このほう	僕					
	二人稱 (第二稱)	な なれ なれ	なむぢ いまし いまし	みまし きんち きんち	わぬし わねもこ わねもこ	わんみ わんこ わんこ	わぎの わぎみ わぎみ	まらさ そい	おれ おのれ	そのほう 御邊	貴殿	
	三人稱 (第三稱)	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ	か かれ
	不定稱	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ	た たれ

(注意)

二人稱なる「わ」は親愛の意にして「お」は、崇敬の意なり  
一人稱の「み」「僕」は男性にのみ用ふ

又、君主に對して「臣」と云ふ  
又、一人稱の女性に「わらは」あり。古くは言はぬことなり。論語に、邦君之妻、君稱之曰「夫人」。夫人自稱曰「小童」。さあるに由れるものとせばしく、大夫以上あたりの夫人の謙辭なりしを、現今「妾」の字にあてり。一般婦人の稱のやうに云へり。當らぬに似たり。又、「妾」の字は、「臣」の女性なり

又、二人稱に用ふる「われ」「おれ」は、そしりたるいひざまなり。「ウマ」といはんが如し。三人稱の「ウマツ」「キヤツ」に同じ

又、一人稱に「てまへ」といひ、二人稱に「おてまへ」といふを、同じそしりざまには、二人稱に一人稱を用ふるこゝ、猶「おのれ」の例の如し

又、「あ」「あれ」は、も一人稱なるを、今は三人稱の口語に用ふ  
又、「閣下」「足下」の如きも、二人稱に用ふ

又「卿」は君の臣を呼び給ふ稱にして、女性には夫の妻を呼ぶ稱なり  
表中——縦線あるは、名詞より轉せる代名詞なり

この外に「子」「息子」「乃公」等あれども茲に用なし  
又「先生」「大人」等は、名詞なり

事	物	これ	そ	それ	あ	あれ	いづれ	なに
場	所	こゝ	そこ		か	あそこ	いづこ	いづく
地	位	こちら	そち		あち		いづち	
方	向	こなた	そなた		あなた	あなた	いづなた	いづら

(注意)

「わが」「この」「その」などは、一語にあらず。助辭のそはれるなり  
「この」「その」「もの」「いづれの」を指示代名詞とも云ふ

數 詞

數をいひあらはすことばなり

『ひと』『ふた』『み』『みそ』『よそ』の如きを云ふ。これを『ひとつ』と『いへば』  
『つ』は箇數をあらはし、『ふたり』と『いへば』は人数をあらはし。『みとせ』と『いへば』は年數をあらはし。『みそち』『よそち』と『いへば』は『つ』に同じく箇數をあらはす。然れどもこれらの『つ』『ら』『せ』『ち』は

獨立の語にあらず、數詞の接尾語と云ふ。「ひとこと」「ふたうち」「みくさ」「みともじ」「よそたび」など、一同視すべからず

又普通數と、順序數との區別あり。順序數は「第一」「二號」「三番」又「第二號」「第三番」などいふ。この「第」「番」「號」ともに數詞と見るべし

(注意) 「一人」を「イツシン」と申せば天子の御事、「イチノヒト」といふは攝籙の事、「イチニン」といふは人ひとりの事なる。されど、「一」は多く順序數に用ふるにあり。「一の宮」「一の女」の如し。故に「一大隊」は「第一大隊」にあらず、時「一個大隊」といふ如きにあり。「二卷」「三時」など、順序數なきはまきはし

副 詞

副詞は、動詞形容詞、また他の副詞にそひて、その動作、狀況を形容することばなり

生	(いと) (形状言に付く)	寒し
得	(ひたそら)	思ふ
の	(しばし)	留る

副 詞

(はなはだ)  
(すこぶる)  
(かならず)

高し  
遠し  
來きる

(まばら)  
(つら)  
(ほど)  
(なか)  
(いと)

語る  
思ふ  
忘る  
可笑し  
よし  
行け

(ほど) (こ)  
(はら) (こ)  
(から) (こ)

敲く  
落つ  
笑ふ

重 語 の 副 詞

(とく) (こ)

逝く  
思ふ  
悲し

夜 (まづか)  
後に (つまびらか)  
年 (あらた)  
事情 (あきらか)

なり  
なり  
なり  
なり

接 續	(つひ) に	逝く	夜 (まづか)	なり
の 助 辭	(さら) に	思ふ	後に (つまびらか)	なり
に 『 』	(こと) に	悲し	年 (あらた)	なり
受 け			事情 (あきらか)	なり





接頭語

種々の語の頭につきて意義を添ふるを云ふ。獨立せず  
接頭語に二種あり

第一類 一音にして幽微なる意義を有す

接頭語	體	言	動	詞	形	狀	言
け							
か							
さ			行く 寄る 通ふ				
			座す				
					青 <sup>アヲ</sup>	黒	易し
					弱し		
					亮 <sup>キヤカ</sup>	近し(氣)	遠し(氣)
					恐し(氣)	疎し(氣)	

み	ま	た	さ	
嶺 <sup>ナ</sup> 山谷 空坂 井	白良濱 熊野		檜隈 百合 男鹿 衣 筵 夜 野(津鳥) 榛 丹塗 苗(五月) 桃(五月) 蕨(早)	
		比ぶ 謀る 走る	渡る 迷ふ 寢 <sup>ネ</sup>	
		易し 弱し	青 <sup>アヲ</sup>	長し(來經)

を	筑波 簾 川 舟 田 山田 篠	止む(小)	暗し(小)
---	--------------------	-------	-------

第二類 一音または一音以上にして、品詞の如き意義を有するを云ふ

接頭語	體言	動詞	詞	形	狀	言
御 <sup>ミ</sup> 御 <sup>メ</sup> 御 <sup>オホミ</sup> 大御 <sup>オホミ</sup>	位代心 社執し(弓) 佩し(刀) 着し(衣)	所御佩之十拳劔(記) 御作歌(萬)		御いたはしくて(吉野拾遺)		
眞	玉白心直中					

(注意) 成句には、「御」の字を上付く  
是や佛の御(迦陵頻伽の聲)ならん(紅葉賀)  
仁明天皇の御(第一の皇子)なり(大鏡)  
又、その下の體言を省くことあり

	小 <sup>コ</sup>	新 <sup>ニヒ</sup>	初 <sup>ハジメ</sup>	初 <sup>ハジメ</sup>	素 <sup>ソ</sup>	生 <sup>ナマ</sup>	僻 <sup>ヒナギ</sup>
者事 學者 法師	路刀松聲家 袖馬	室壘枕参り	冠事學び	雪穗霜音子 空花春	手足肌顔謠 通り浪人襖話 引乾燒	絲絹紙藥	者目事心得訓 耳心覺
			立つ				
	高し 暗し						

展 <small>シ</small>	仄 <small>ハ</small>	逸 <small>イ</small>	彌 <small>イ</small>	幾 <small>イ</small>	(異) <small>コト</small>	諸 <small>モロ</small>	偽 <small>マコト</small>
溺		物足	繼繼 先 從弟	(注意)「幾久し」 <small>さいひひ</small> 永久の義とするは常らず	世 年 日 夜 度 重	人 國 事 處 心 矢 膝 肌 乃	太刀 笑 (注意) 曲者。曲事。なまの「くせ」は、接頭語にあらず
鳴く 叩く 起つ	見ゆ 聞ゆ 語る	増す	高し 珍し				
	暗し	早し 著し					

接尾語

種々の語の尾につきて意義を添ふるを云ふ

體	言	動	詞	形 狀	言	接尾語
調を助く この夜(一)は(萬葉)		(續用段) 彼ト此トヲスル意 泣き(一) 笑ひ(一) 降り(一) 降らず(一)		(語根)「ニョリテ」の意 早 寒 遠 べ 又、名詞法トナル 深 白	(語根)「コトヨ」の意 さやけ 嬉し 又、名詞法トナル 憂 つら	み さ ら
				(語根) 調を助く わびし(一)に(今古)		

	(續用段) あり	(語根) くるし	
特ニ人ノ上	續體段		(五)
ひとふたみた			り

『ども』『たち』『ばら』『ち』『ら』『な』『か』『日』『ズ』『て』『入』なども皆  
接尾語とすべし

### 文章

言語相集りて完全なる意義をなすを文と云ふ

意義の完全なるとは、事物につきて、動作、形状をあらはそを云ふ意義  
のいまだ完全せざるものを句と云ふ

### 係結

- (一) 第一が、第一と重なる時は、断止段を以て結ぶ
- (二) 第一が、第二と重なる時は、續體段を以て結ぶ
- (三) 第一が、第三と重なる時は、已然段を以て結ぶ
- (四) 第二第三の、互に重なること無し
- (五) 係結の内に、他の係結が胚まれて二重にとゝのへるものは、第二第三の互に重なれるにあらず
- (六) 結は、次の三ツの場合には省かるゝことあり
  - (イ) 係を段落とする時
  - (ロ) 體言を段落とする時
  - (ハ) いひかけの時
- (七) 第一に對して續體段を以て結べるものは、咏歎の意なり

○練習

次の例につきて係結の正否を辨せよ

- (一) 玉章に涙のかゝる心地してまぐる、空に雁のなくなり  
(千載)
- (二) 宮城野の萩や小鹿のつまならむ花さきしより聲の色な  
(千載)
- (三) 秋の田のいれてふこをかけしは思ひいづるがうれ  
しげもなし(後撰)
- (四) わが宿の梅の立枝や見えつらん思ひのほかは君がま  
せる(拾遺)
- (五) 夜やくらき道やまごへる時鳥わが宿をしもすぎかてに  
なく(古今)
- (六) 奥山にもみぢふみわけなく鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき  
(古今)
- (七) 影こぼる霜夜の月ぞ秋をわきて時こそあれささやけか  
りける(新葉)
- (八) 大願の力にや昨日なん都よりまうて來つる(竹取)
- (九) 明石鴻船鳴をわけて見渡せば霞のうへも沖津白浪  
(古今)
- (十) かへるさを待ち心見よかくながらよもたぐにてはやま  
しなの里(後拾遺)
- (十一) いかなる勇烈老功の士たりさいふさも是には過ぎまじ  
きを見ゆしとて(駿古雜話)

主語

客語

説明語

○主語 (文主)

日主語 説明語  
照る

○客語

日客語 國土 を 照らす

○修飾語

(赫々たる) 日は (あらゆる) 國土 を (明かに) 照す

○總主語

月總主 は 光主 なつかし

象總主 は 力主 強し

○補語 (同格主語)

猿 は 動物補語 なり

- (一) 主語は、二個以上あるを得  
白露も夢もこの世も幻もたどへていはゞ久しかりけり(後拾遺)
- (二) 説明語も、二個以上あるを得  
夏の日は熱し苦し
- (三) 客語も二個以上あるを得  
君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る(古今)
- (四) 主語は、文中に現はれざることあり  
櫻花今日よく見てん吳竹の一よの程にちりもこそすれ(後撰)
- (五) まづ主語をおき次に客語をおき、最後に説明語をおくを、文章における  
排列の順序とす。但し、この順序は、文調のために變換せらるゝを得  
ふさまよふ野風を寒み秋萩のうつりもゆくか人の心の(古今)  
よと共に玉ちる床の菅枕見せばや人に夜半のけしきを(金葉)
- (六) 單文と單文とが聯りて復文となる時は、上下部の單文を相かさね、又は、

接續助辭もて相接續し、若しくは、上部の單文の語尾を續用段に轉じて  
下部にて相受けしむ

- (七) 二個以上の單文が否定助辭を以て終れる時は、上部の單文の否定助辭  
を省きて、下部にて相受く

# 日本文典大綱

終

2/36

明治三十五年二月十四日印刷  
明治三十五年二月十八日發行

著 者

東京市牛込區岩戸町二十番地  
鈴木 忠 孝

發 行 者

東京市神田區三崎町二丁目十二番地  
杉 浦 鋼 太 郎

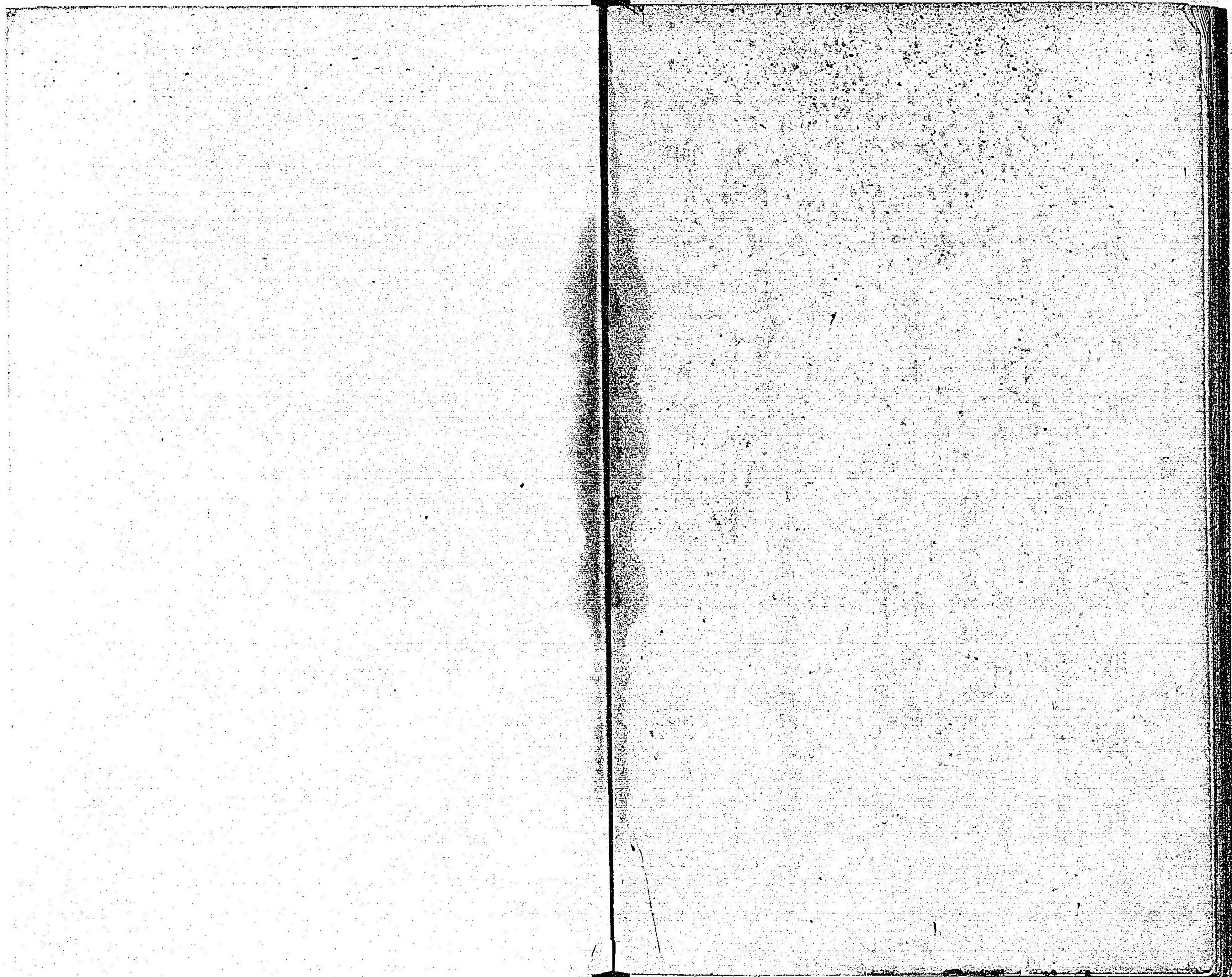
印 刷 者

東京市神田區小川町一番地  
多 田 榮 次

東京市神田區三崎町一丁目三番地

發 行 所

大 成 學 館





19  
534

